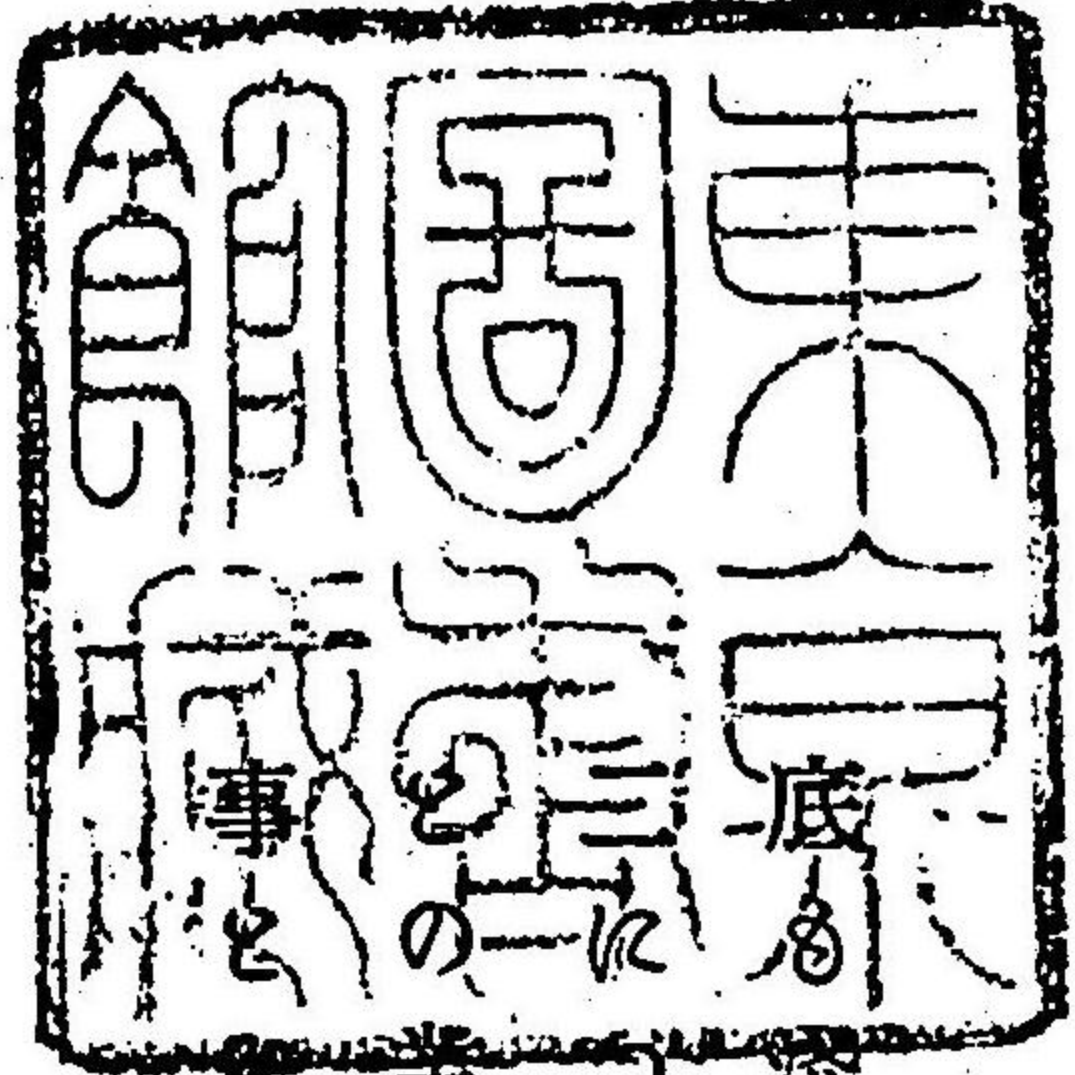


74
59

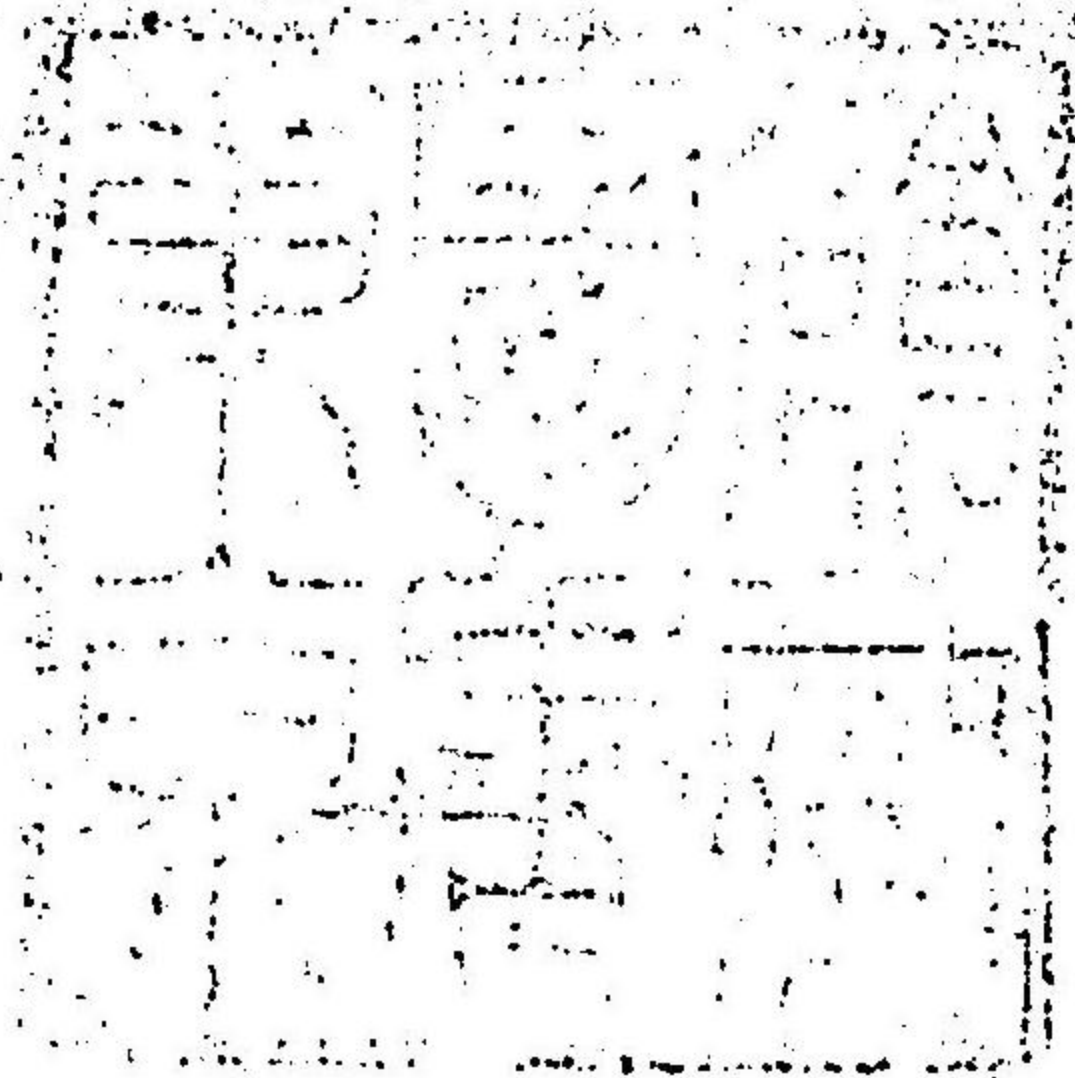
浪の
文庫

志方





後げれと浪六文庫より第一番に曳出したるは「花車」第
 一巻に「まみぬいたるはこの「おなさだめ」あはれ誰に見せむ
 業にもあらずたゞ嵩山堂の主人にせがまれて、かゝる
 となりぬ、





浪六の内文
志なごため

眠獅菴主人 浪六著

佛祖は外面如菩薩内心如夜叉と説て憎めども、その實は衆生
濟度の方便も叶はぬ敵と怖れて舌を巻き、儒道の先達は女子
と小人を養ひ難しと卑めども、その實は仁義五常の盾にも防
げぬ力に呆れて驚き、西洋の人は女を愛の神と稱えて尊敬し
ながら變る目玉の髯面を回せば、薔薇に一種の魔力ありとい
ひ女は秘密の鍵として意の用心さらに怠情なし、

浪六が女にかゝる小説腹稿百番のうち、その四十番を引ぬい
て、たゞ面影の匂ひばかりを著はしぬ。「このもといはいつこな
るらむ春の夜の月もおぼろに匂ふ梅が香」これは誰やらの口
ずさみなりける、

されば古今東西いづれの歴史を繙いても、修羅の巷に血河扇
山を築く表の裏には、いろどる几帳の影に虫も殺さぬ花の上
膺ましくして、近くは徳川氏江戸三百年の大仕掛も、雲を突
抜く毛鎗の穂先と闇にも輝く金枝先箱とのみ思ひの外、あや
つる糸は人知れぬ千代田の城の大奥に潜んで、もゆる丹花の
唇端べちや〜と吐した力が多ひとやら、これを人にしては
悪七兵衛景清も五條坂にうかれて豫襲の出来損ひとなり、曾
我の若殿原も大磯小磯の夕まぐれに十八年の天津風まんまと
三年を遺後れ、ついに泣かぬ辨慶が泣いたも元は戀ゆえにて、
御曹子牛若丸の昔より積た手柄の粉となつて腰越狀に腰抜け
しも、義経とやら宜きに計らえど仰せられし建禮門院が八島
の船中の首尾からとやら、あな怖ろし、さても怖ろしき此も
の、害毒は鐵で鍊えし鐘の實も何のその、旭將軍義仲の

首ッ玉にかちりついで江州粟津の里に寒帷子の墓さぶく、左
中將義貞ぬしの膝を捻つて建武中興の政道を毀しぬ、さては
源氏の後家との豊臣の後家との、いづれも前の空屋から火を
出して母屋の雨戸一枚残さぬ九焼に、その火の粉は後世凡夫
の家にもまで飛散つて、火の車ひく大牛のッそりと白壁の割目
より道出せば、千両の家臺骨腐つて一夜に仆れ萬金の大厦高
樓忽ち虫の啼音の野原となる、乃至また時に抜山蓋世の英雄
をして女兒に泣くの歎あらしめ、文珠普賢の智徳にも臍を舐
ふつて後悔の涙あらしめ、古來いくばくの可憐ら男が世を振
棄て、山に入り水に漂ふ無分別も七分は彼女が爲す業にて、
雲に乗る仙人も忘れがたき故郷の煩惱に通を失ふては下界に
轉がり落ちぬ、あんど女の髪もて大象を繋ぐの力に驚かむ、
なんぞ今更ら履ける駒下駄の音からころに浮世の鹿の寄るを

怪しまむ、天下には國家紛乱の源因、大名には御家騒動の種子、古來みだりに怖れて傾城傾國の文字を與へしより、街道筋の飯盛おじやれも陣屋ぐらいを傾けむと欲し、一家に取ては大黒柱の根を掘る鋤鐵、一人の身には生命を削る斧とあり鉤となり、眼前ちよんの間の惡戯にも毛脛男の血を絞る骨を抜て正氣を喪はしむ、さりどて彼女の陰險深酷なる、真正面より駭來つて青天白日の下に毒を注がず、夜更け人定まつて燈火の幽なる影、雨をぼふりて人なき徒然の時、あるは月雪花の清き舞臺を藉りて己が姿を粧ひつゝ、泣くが如く笑ふが如く怨むが如く訴ふるが如く、強るとやら曲るとやら、しどけ容色やはく、と持掛け、いぢらしげの面影ふはく、と寄掛け、宛から小兒の戯るゝに似たるうち吃と男の油断を見濟して、こゝぞ

と思ふ急所の咽喉笛に飛付き喰付く勢の凄まじさ、あゝ何をもて物の假令に引かむ、もしそれ其うまれし生育を見れば、母の胎内をいづるより先づ双親に行末なんくの深き思慮を惱ませ、やうく六歳七歳のころとなりては彌生の空の雛遊びにも、はや友垣と尻目づかひに怨恨嫌妬の高藤やむ時あく八歳九歳の物心つけば自然と紅白粉の香を慕ふて、ちよこく走りの人なき横町に己が姿を見返り、十一十二の曉には誰が教えねど小唄まじりに入らざる世話の燒鹽梅をおぼえ、燕口をあいて餘所の噂を囁づり小尻を振つて用なき門を差覗き、さては人の談話に足音ぬすんで立聞く風情、そもや十三十四十五の春ともなれば、苔の花の我がから暖室に入りたき心地して、先祖の位牌を削り直せば下駄にも履くべき勢ありながら顔を赤めて男は怖いものとぞ吐しおる、いさや十六十七は寐

よげに見ゆる若草の萌ゆる情を忍びつゝ、生命を繋ぐ三度の
 飯を恥ぢ散來る木葉も呵しうて、そもくこれが嘘八百のつ
 きはじめ、やがて鬼さへ十八の角をかしく色賣る頃ともなれ
 ば、人殺しの本性いつしか備はりて、十九や二十歳の膏に火
 宅の煩惱を餓させ、二十五の赤き舌端には鐵の板をも舐めて
 通すとかや、よし然あくとも女といふ的、これが木の股から
 孕んで土の中より這出ねばこそ、身持正しく優しい娘と賞め
 られてからが大盜賊、長の年月さんく親に苦勞をかけた上、
 また、かの荷物を行列させて己が好たところへ立去る始末、
 あゝ何として斯る冥加に叶ひしぞや、
 五人の女子を持てば夜盜も其門を窺はず、三人の娘よく千金
 の軒を傾くるよりは今に始めぬ浮世の謔、されば世上の粹を穿
 ちし阿爺の腹立に、男の腕白を毀潰し親泣せと叱れども、女

の子には家潰し親殺しと叫んで喚きぬ、乃至また満足に嫁し
 て後も生涯瓦人の厄介物、たとひ七人の子を生じても此もの
 に肌ゆるすなど、古來いひあはした用心堅固の防矢も女には
 何の効驗なく、烏鍋で酒まいつた後の齒楊子はとも思はれい
 で、一點の朱唇、萬斛の秋波、風ひかぬ鼻をつまらせて膝に
 身を抛掛け、やいのくといはれし曉は無念ながら男に骨と
 いふものありやなしや、
 おもえば世間幾千万の男兒、悲哉こいつのためには皮肉を喰は
 れて多少の手紙おはざるものやある、やむごとなき上の方は
 借おき、心の底の知れぬ奥様となつては嚴めしき御前を物の
 美事に取越さ、悪魔を宿す御部屋と呼ばれては機をみて殿中
 を引轉返し、正体わからぬお神さんは必ず旦那殿の身代にた
 り、赤い手がらの御新造も黒い腹には出世男の前途を遮り、

か、ア左衛門尉と名乗をあげられては稼げても働けども亭主
 野郎の浮ばひ瀬なく、裏店に住む山の神と荒れては宿六いか
 に力ひども何の甲斐がある、その他には遊女となり歌妓とな
 り舞妓お酌となり妾と稱し地獄と呼び、さまざまの工夫いろ
 の化の皮、手を代え品を替て千變萬化に振舞へば、鬼を
 煮て食ふほどの勇士も之を退治せむこと難かるべし、
 神算鬼謀とて何を何うして何うすればとて、所詮叶はぬ當時の
 世界は、あらゆる男いつれも兜を脱で禪門に降参しけむ、二
 千年の往昔より口を極めて罵り來りし悪口雜言を、あはれ此
 頃の腰拔共、そろく謝罪文と引替えつゝ、いや女は美とい
 ふものゝ生靈だの、いや男よりも神に近いの、交際場裡の王
 様だの、弱肉強食の蠻風を和らぐる妙劑だの、一足の進歩は
 忽ち闇夜の光明とあるの、一句の聲は則ち微妙の音楽をさく

に等しいの、お陰で私共が生きて居りますの、下されます
 る戀の財物には生命をさへげて献身的の愛を報ひますのど、
 さらぬも邪慳あくあきの怪物に追従輕薄の諛辭を呈して阿り
 しかば、宛がら薪に油を注ぎしが如く奥州玄やくら馬の尻
 を鞭ちしが如く、いよく増長して益々ひツかさまはさむと、
 古來さすがに世を憚かつて裏田甫より現ひしものが、今は本
 街道に現はれいで、其毒を四面八方に振りまく猛威、もはや
 脛腰よはき男の一人旅は無用の世界とぞなりける、
 ましてや當時は學問といふもの彼女を扶けて、およそ多少の
 文字を讀まぬものあければ、女大學一冊の母親を言伏せるこ
 と手許の下女を叱るより易く、四書五經の父を遣込むること
 隣家の猫を逐ふに等しく、もし己が心に叶はぬ事あれば忽然
 ピンとヤンと跳廻つて、不幸ある妾の生涯は闇の片隅に置か

れた玉も同前、文明の光輝には逆も照らされませむなと吐
 して泣く、もしそれ平生より子に脆き甘口の親なれば、石臼
 を揚子で突通すが如き無理難題を持出して、さかれずば無病
 息災の身を我から疾病と稱し、部屋に閉籠つて今にも死さう
 なる小面の憎き振舞、さては親が持つ良人にあらず姑舅に嫁
 する妻あらずと、こゝに自由結婚とやらの大議論を行ふては、
 まづ第一に男の弱點を捉えて自己が氣儘の利劍となし、いさ
 どいは、これを真向額に振被つての大あらび、妾は貴下の玩
 弄物で御座いませんと吼ゆる面相、あゝ戀も情も褪果て、今
 更ら二目で見らるべきや、うては泣き撫れば甘え殺せば化て
 出るとは往昔の世蔭、今の女を打ては忽ち辻の交番所に訴へ、
 愛すれば贅澤いよ、裏つて家を亡ぼし、殺さんとすれば電
 光石火の間一髪に裁判沙汰となつて、彼女すでに餘所の男と

手を引きながら新聞紙上の宣告文で鼻をかむべし、

たま〜 明治二十九年十二月二日の夜、わが讀書の坐
 とせる眠獅巷の燈火かゝげて、いたづらがきの筆のま
 にく、一氣呵成に此稿を起しつゝ、なほも飽くまで
 女といふものを叩き潰さむと思ひしが、軒近き白蟻の
 森に木枯の音さぶく、遠き淺草寺の鐘の音も更渡り、
 流るゝ隅田川の水潮に筏の舟唄いつしか我を誘ふて、
 うと〜と眠りし耳に浪六〜と呼ぶものあり、はッ
 と驚いて見上ぐれば白衣を着たる銀髯の翁、四邊に薫
 せる香氣の中より笑を含んでいふ、夢にあらはれて文

士の種子を作るは古臭き業あれど、我はこれ出雲の大社に女人を司とる神にして、汝が今夜の愚痴迷妄を教えむがために來れり、そもく、當時の女は諸事ひがしを嫌ふて我を袖にする不所存もの多けれど、また汝がやうに悉く蹴て悪魔外道とするは、いはゆる角を矯めて牛を殺すの類、骨を舐めて肉の味を知らざるの凡例、まいて汝を生みし母も女にあらすや、この末に汝が子孫を生むも女にあらすや、さるを唯おのれが狭き心の輩の節穴より天下あらゆる幾千万の女人を叱して、唯一言の下に喝破せむとするは、借も初心の振舞ひ若輩の致方、あゝ浪六いまだ若いかなく、その若いところを憫んで茲に汝が見聞を廣からしめむがため、このはせよ、我を斬り我に口説て良縁を求めむとする婦女四

十人を貸與へむ、いちく、呼寄せて女さまと、心いるく、の善惡邪正を見るべし、但し四十人の婦女は皆いづれも既に意中の男ありて我また近日に開届けやらむと思ふ節もあれば、たどひ汝が心に如何はと好たどて猥りがましき行状あるべからず、もし萬々一にも横懸幕しかけて手を握り色目など使は、命數の神に言合めて忽ち汝の生命を縮むべし、かならずく、夢どな思ひぞ、さらばく、といふ聲もろとも翁の姿きえて、あどに残るは影なき香氣の馥郁たるのみ、おりしも門外に絶間なき人の足音して、四十人の婦女いつこよりか一時に押寄せつ、此家ぢやく、といふ聲しきりに聞へける、しかも谷の戸いつる驚きくが如く、やさしう細く牙えて恥かしげを帯びぬ、

いかに月下氷神のなす業とはいへ、いかに生涯大事の男定ど
 はいへ、平生は飯食む唇端をも恥ぢて鐵の音にも泣騒ぐ手弱
 女の、かゝる夜深に斯くまで詰掛け押寄せつゝ、島田束髪蝶
 々の浪をうたせて劣らじ遣らしと先を争ふ運葉の勢ひ、これ
 が女の身なればこそ、もし百姓一揆なれば関の聲もろども忽
 ち眠獅巻を踏潰されて、浪六の生命は固より曉の霜に消えな
 ひものど、さすがの我も驚き呆れて門前に飛出し、いづれも
 静かに、こゝに四十本の觀世捨を差上げまする間、その
 捨を戻して書付けたる番號の順序に、一より四十まで一人づ
 つお道入り下さりませ、何分にも手袋の書齋にて、おりから

の深夜に母屋の者も夢の最中、せめてお茶一碗の手さへ届か
 ん段は平に御用捨下されて、御難澁ながら暫時そこに其まゝ
 お待ち遊ばせ、御大勢なれど都門を離れし向島の一軒、近處
 合壁のないは時に取ての僮伴あがら、もし例の入らざる口論
 などなさるゝ方は、番號の順にかまはず最後におまはし申し
 ます、こりやく、智備よ、いや智備とは此に居る浪六が愛犬
 の名に御座ります、決して彼の方々に吠えるなよ、またと再
 び御入來のない珍客違ぢや、怠りなく張番をして怪俄ないや
 うに御護申せど、人を静め犬を制して書齋に入りつゝ、はッ
 と一息ついで燈火かきたて、悪口雑言せし宵の草稿を机の下
 に押隠し、坐を正して待つ間はどなく輕き足音に、御免あそ
 ばせといふ優しの聲を聞えぬ、
 つめかけし四十人のうち第一番の間に當りしを、いかなる女

と思ひの外、さても油断のならぬは女の子にて、年齢のころやうく、十四五の少女、詩人の目には天桃花上露無聲ともいふべきか、また肩揚ふかく乳房の痕を残しあがら、親御は夢にも知らぬ心の豆粒、はや發けて小まざくれたる情の年ぼたくど、朝夕の念願に思ふ男を祈ればこそ、月下氷神に驅出されて此席に押寄せたる先登第一の證據歴然、かくしもあらぬ目元口元晴渡りて、桃割どかやいふ髪の艶うるはしく、際立つ雪の額に剃刀あてぬ眉毛の濃く太きは、これぞ浮世が欺さるゝ未通氣なれど、兩手の指先に自然と力を入れて物いふ毎に動く風情は、此女すでに既に小兒でない怖ろしさ、燈火に背いて萬事まよんぼりともせず、羽三重地の頬邊に笑渦を浮べつゝ、語る言葉の端々へ何とやらひ大人備たり、たゞし妾は十人並に勝れて家は貴冑の中に位し、まかも外見よりは

内福に育ちしやうなれど、本尊の性質おきやんに走つて手固き商人の娘とは見へず、料理屋待合なんどに母方の親類を持つて、おりく好もしげに往來するかと思ふ風情ありける、

第一番

妾の家は海苔と卵子を臺の乾物屋で、お父様は近處評判のやかましや、それに母様が太の出嫌ひですから、年に二度のね芝居も月に一夜の寄席さへ、なか／＼やつて下さらないンですもの、だからお友達の間でも妾一人は退物のやうに、くやし／＼オホ、名ですか、妾の名は菊、お菊は皿屋敷の幽霊の名だといひますから、氣味が悪くてなりませんよ、年は十五で同胞は兄様が一、人、ですが、この兄様は三年ほど前に田舎の親類から貰つた兄様で、妾の眞實の兄様でないから嫌です、お父

様や御母様には大變お氣に入てる様ですが、妾はまみく
 嫌、此頃は猶更ら嫌で、堪りませんよ、いくら伶俐で
 家業の爲にあるッたて、あの色の眞黒な鼻のひらッたい、
 どんより目玉で、いがり頭の塵埃だらけ、おまけに齒
 なんざア磨いた事がないから臭う御坐いますッ、お湯は
 五日に一度ぐらい、それも今いッたかと思ふと忽然に歸
 つてくるンですもの、そこを何うして洗ふのでせう、朝
 から晩まで店の小僧と同様になつて間屋から来た荷物を
 かついだり何かするところば、まるで立ンばの様で、妾
 は見るのも虫が好きませんッ、それに生意氣ぢやア御坐
 いませんか、妾の事を、さいちやんだッて、さいちやん
 も宜う御坐いますが、來年の秋か冬には、お菊くとい
 はれる様になりやアしあいかど、今から苦勞で、堪り

ませんッ、もしさうなれば、妾は逆も生きて居ない覺悟、
 死でしさいます、いッそ川へ身を投げた方が優だらうと
 思ひますよ、誰が生きて居ますものか、あんな男に身を
 まかすくらいなら横町の黒犬のお嫁にでもなりますッ、
 はんどにさオホ、、、、、もし妾が、萬一ぢや御座いま
 せん、きッと妾が、たどひお父様や母様が何と仰えやッ
 ても、きッと妾が一生懸命に、すいた御方は、つい近處
 に御座いますの、名高い小間物屋の御子息で、お年は二
 十歳、すらりッとした優形で、色がお白うて目元が愛く
 ろしくッて、髪や眉毛の濃いこと、つや／＼として
 殿御には惜しいやうですよ、そして柔和で意氣で人柄で、
 わまり物も仰えやいませんが、自然と羨れるやうな愛嬌
 を含んで、いつも店前に座つて居なさいますから、みんな

なが大騒ぎですよ、どんなに宜いでせう、俳優でも叶ひ
 ませんワ、まるで繪にかいた力彌が散髪したやうで、指
 なんかの奇麗に細いこと、家の兄様の四半分はせしかわ
 りませんよ、妾が毎日お針の稽古に往來するを、あの方
 も妾を見てね、そして何です、人の知れないやうに、ち
 よいと、目で會釋をなさるんですもの、いつかも妾が、
 紅を買って往った時、紅の外に、そつと櫻の管を下すつてね、
 向島や上野の花よりお菊さんの頭に咲くのを見たいッて、
 こんな戯戯を仰しやるんですよ、その時の恥かしさ、嬉
 しくつて、勿体ない、平生の頭髮へ差せるもんです
 か、手文庫の内へ大事に仕舞つて置かうとされたを、どん
 ぐり眼の嫌な兄様が目つけて、その櫻は色が悪いの花の
 出来が下手のと、田舎生の何にも知らないくせに、から

かい半分いろんな事をいひましたから、腹が立で、口惜
 くつて、まッ黒な顔中を兩手で引掻てやりましたら、頬
 邊から血が吹出て驚いた時の呵しさ、今戸焼の羅漢様が
 棚からおツこちて龜裂の入つた様で、二目とは見られま
 せんでしたよ、それから妾は兄様を仇敵と思つて居ます
 から、ろくに物もいつてやらないんです、聲を聞てさへ
 身が縮みますすワ、ですから妾は何うしても生て居られま
 せん、いきで居るからには、おさんどんになつても、
 あの方の御傍で暮したう御坐います、お父様や母様が妾
 をさへ出して下さるなら、嫌な兄様に家業を遣つて、妾
 は寝衣一枚で潔好、あの方の御傍へ、さつと、さつとま
 いりますすワ、
 性質の小才はまつて利發のやうなれど、流石は浮世の巷を知

らぬ十五の少女、鏡花水月どるに取られぬ果敢なき色をたの
 むで、事の首尾さへ捕はぬ戀の念願を囁りつゝ、いそぐと
 立去りし後に入替つて静かに坐せし第二番は、まづ年紀十八
 九、當世顔の丸ぼちやに曙の櫻色、ちと身分によりて品位を
 欠くの恐あれども、四つの面道具に聊かの申分なく、わけて
 際立つは眉の長さと自然に生止りし額の美事さ、首筋すつと
 立伸びて稱毛あしの後髪、髪づらの横顔には更に一段の風情
 を添え、手足の肉置ゆたかに指の瓜うすく、物越の優なる衣
 装つきの温順しき、さては思想の騒がしからぬも知られて、
 女の諸藝普通は遣つて退けたるだけに、わざと顔色に出さぬ
 身のたしなみ、いづれ嬢様と冊かかれて一人歩行のならぬ生育
 を、わざと夜深に此席まで来られしからは、所詮しのびか
 ねたる戀の下草、よくの事なるべしと思ふに取扱へば、

恥かしげに身を背けて顔うち赤り、かたる聲さへ細く哀れに
 私語さぬ、

第二番

父は或會社の長をいたして、少しは世間に知られて居り
 ますものゝ、妾は御覽の通り不束な性質、去年の冬やう
 一個の女學校を出ましたばかりで、まだ何事も存じ
 ません、もはや年だけは年頃になるからと、父は頼り
 に氣を揉んで、あれこれ心配してくれました中に、おなじ
 會社の役員で只今は地位も低う御坐います、末の見込
 は充分あるとかで、ことし二十九になる方が御坐いまし
 て、まづこれと申して居ります、勿論、その方は御容
 貌も立派で學問も才も、かたぐ社中の評判も至極よい
 やうで、妾風情の分には過ぎたお人、第一が親の目鏡に

叶つた上は、決して、なか／＼嫌の何のと申すのでは御
 坐いせんが、妾は、妾は當分、ここも参りたう御坐
 いせんから、もう三四年の間は此まゝで、いえ／＼何
 も別にホ、ホ、別段これといふ目的も、はい、ホ、ホ、
 はい、それでは此席ぎり、貴方だけに、うちあけて申上
 げますから、ですが、きつとお笑ひなさいますよ、お笑
 ひ遊ばしちやア嫌で御坐いますよ、きつとお怒み申し
 ますよ、せんたい妾を、こんなに致しましたは、あ
 の清で御坐います、清は外の奉公人と違ひ、幼少の時か
 ら古く家へまいつて、よく氣心の分つたもので御坐いま
 すから、學校の送り迎ひ其他、清を連れて往けば親共も
 安心して妾を出すほどで御坐いましたか、てうと去年の
 秋、一日、途中から清に別れて上野の繪巻共進會へま

いりました折、水彩畫の中に貴方、びつくら致しました
 よ、妾の姿が其ま／＼繪になつて出て居ましたから、そし
 て其前は黒山のやうな観客で、いろ／＼な事をいつてるン
 ですもの、妾は顔が眞赤になつて、のぼせあがつて、ど
 うせうかと思ひましたよ、すると清も顔色を變て、まき
 りに袖を引張りますから、やつの事で門外まで夢中に
 駈出し、ほつと溜息ついで胸を撫りました時、清が目
 ひいて申しますには、お嬢様まツかり遊ばせ、ひよい奴
 で御座います、いえ／＼怪しからん畜生で御座います、
 貴嬢を、さんざ世話になつてる家の娘の御主人を畫に描
 きくさつて、観物か何ぞのやうに、あいつ顔にも似合な
 い不埒な奴で、よろしう御座います、これから寄て直ぐ
 に叩き出してやります、畜生／＼と頻りに妙な手形をし

て譯の分らない事を申しますから、よく／＼氣を静めて
 聞いてみますと、三年はを前に美術學校を卒業した書生さ
 んで清が母親の二階に下宿して居る人が御座いました、
 いつか清にやつた妻の寫眞を、母親から無理に借出して
 手本にしたのださうで御座います、妻も一時は口惜くッ
 て、もし知れたなら物固い両親の手前、また騒々しい學
 校朋輩の人達へも、それやこれやで涙が溢れるほど残念
 に思ひました、が、いくら騒いだって今更ら外に仕様も御
 座いせんから、ともかくも至急あの肖像を取退けるや
 う、清に言合めて母親の家へ遣りましたもの、妻の身
 とさへいえば丸で狂氣同然の清の事ですから、定めて遠
 慮會釋もなく頭上から其書生さんに囁付いて、もし間違
 でもなければ宜い、が、實は必配して居りましたら、案

の定、すぐ翌日、肖像の繪を此方へ取上げた上に貴方、
 なんです、謝罪狀一通を添て持つて歸りましたには、
 妻も呆れて、氣の毒やら耻かしいやら、まかし清は猶こ
 れでも得心がゆかないとて、まきりに母親へ追つて其書
 生さんを追出さうと致しますから、それだけは無理に引
 止めて、せうせ返すもの、一寸まア、こんな事を書てあ
 るかど、その謝罪狀を讀でみましたのがホ、ホ、妻の、
 こんなになつた基で御座います、だから今では清に對し
 ても、なんといつて宜いやら、まきりが悪くつて、穴へ
 も這入たい心地が致します、そしてその時の謝罪狀は、
 からで御座いますよ、あのウ、左の手に浮世の賁と
 いふものを握り右の手に美の神の宿るべき筆を持つて、
 あはれ日夜の難行苦悶に餘念あさま、おもはず禮を破

つて叨りに深窓を犯せし罪、そも何をもて償はじ、
 されど、朝夕の丹青を賣て美衣美食に飽くものさへ、一
 年一回の席場に自己が名を署して代價幾何を貪ぼる中に、
 かゝる可憐の貧生が數月の熱血を注いで僅かを得たる一
 面の繪を、無名氏禁賣と大書して掲げし微意を汲み玉は
 い、また世の畫家と自から意志の殊なるを知り玉はじ、
 固より多くの俗に見られ俗に傳へらるゝを好まざるがた
 り、半歳の精華を驅て一朝の小過に投ずること履を脱ぐ
 よりも易し、否とよ、わが信ずる美界の常として禮を失
 せしにわらずと思へども、花の如き君が一擧に逢ふては
 更に顔色さく、こゝに誰んで其罪を謝し併せて畫影を靈
 魂の許に還さじ、憫むべし今や君が侍婢の一叱り他日天
 下の畫太伯たる我をして夜寝るに家なからしめんとす、

願くは君の愛によつて侍婢の怒を慰め、雨露霜雪の難を
 免るゝを得ば幸甚ねエ貴方、まア斯うなんで御座
 いますよ、妾には其文章の妙を今こゝで言はれませんが、
 大体の意味は斯うで、そして字なんかの美事なこと、妾
 は實に、お氣毒で、お可哀さうで、ねエ貴方、立て
 も坐ても堪りませんから、その謝罪状と妾の肖像に、失
 禮ですが、あのウ何です、帯止か指輪にしるッて父から
 貰ひました時計の金鐘を添て、おわび申して返しました
 ら、その鐘を忽然またお戻しなさいましたから、今度は
 清にたのんで、しかし清が、まだ憎まれ口をきいて、あ
 かく承知してくれないんですもの、だからお世辭のあ
 りッたけ、いろくたのんで、清の母親の手許へ送り届
 けました、貨幣になるなら貨幣にして、あの方に知れな

いやう、おりく何か、お好きな食を買ってあげてくれと、その後、ふとした事で清を誘ひだしオホ、今から思ひますと自分の大膽に呆れますが、ちよいと清の母親の家へ寄つて、はじめて其方を見ましたかね、色の浅黒い背の高い、お年は二十五六、ほんとに凛々しい男らしい方なんですよ、あの御様子では、こゝ四五年もたのど、きつと立派な美術家におおんなさいませう、ねエ貴方、
 〓 どうしても妾のやうな不束女は、家を持って給料などお取んなさる方には、逆も氣に入りませんから、なう事なら、あの方の様な、御修行中の人を、父に叱られるかも知れませんが、いえ、そんなに叱られても、この一念は通す覺悟で御座います、それに清も、此頃では妾の心を、よく飲込で居てくれますから、たしかで

御座いますよ、もし妾の思が叶つたら、生涯、清を大事にかけて姉様扱ひに致しますワ、妾の優しきだけに情の色も深く、言葉の静なるだけに思ふ一念も強ければ、世に貧しう心に富める哀れの美術家を見立て、ならば蔭ながら其資を扶け其心を慰めつゝ、人目々のびて運ぶ戀の重荷のかずく、やがて天晴の男に仕終ふせて後、おのが生涯を契りて立ちし浮名も賞られほどの用心堅固、はつかしくいへば逆にとりて順に守るの活氣、流石は當世の舞臺らしき氣風を備えて、おなじ氣儘の婿撰ひにも何處やら人品を羨さぬ節ありて、女一色、戀を生命の小説家あどの手にかけたらば、羅織舞文意匠惨憺、あかしく大層の品物となるべき類なり、これに引違えて庭の飛石に躓きながら慌たしう入来りし第三番は、びかくと襟垢の光りし双子織を身に纏

ふて、おはれ唐繻子を羨む毛繻子の丸帯、それさへ今は處々に
 に巢を立て、一重まばりの肥ッてう、色くツきりと黒く生際
 おぼろに薄く、出類に腫物の痕跡あつて夜具の袖口に似たる
 唇あつく、圓なる狎の目、いかれる獅子の鼻、胸より生抜い
 たる猪首の太さ、兩の頬邊に日の丸の國旗を掲げて年が年中
 いつもお目出たき祭日面、さては頭の縮れ毛に髪附油こきぬ
 ッて人知れぬ苦勞の悲しさ、霜焼の手足を痒さうに藻掻て疊
 に擦る遺瀨なさ、年は二十四五、うまれは丹波の奥山ならね
 公、まかも直接お主の傍へは出られぬ下女と見えて、おさ
 ん大明神、籠の前に鎮坐し、つゝ、井戸端はしりもとに不
 断の光明を放ち、喜怒哀の靈現あらたに忽ち飯の味を變させ玉
 ふ御本体なるべし、但し此機でも叶はぬ懸するだけあつて、

第三番

さすがに言葉は江戸ッ子を學びける、

ちよいと貴方、御免なさいよ、妾どした事が、とんでも
 ない、あまり多勢に押されたもんだから、大事のく、寫
 眞をおッことして仕舞たよ、せうせう、るゝまゝのかは
 だ、寫眞を失なつても本尊がおりやア大丈夫さ、ねエ貴
 方、時に妾の色男は、これまで七年の間に、たつた十三
 人しかありませんでしたよ、その十三人も妾から惚れた
 あア一人もないの、悉皆あツちから小づきまはされて人
 助けに契情てやツたんですから、骨の折れたことッてば、
 なかく、首尾が面倒で、それがため御主人から暇の出た
 のは二十八軒、今あア二十九軒目で砂糖の間屋ですが、
 旦那が辛面で妻女が溢ッ皮と來ているから、あの寫眞の

一件でも知れりやア直ぐ放逐だらうと覺悟して居ますよ、
 どうせ長くないから太く短く手取早く遣付けやうと、此
 ころア人の知らぬ苦勞でなりましたよ、る何です、寫
 眞の男ですか、これこそ妾から打込んだ眞實の色男で、同
 じ家の奉公人ですが、貴方に見せてあげたいよ、年は三
 十二で、さうです、近ごろ口入屋から来た信州の産です
 が、落語の席あんでいふ權助たア憚りあがら權助が違
 つて居ますア、身体が違つて氣心が温順くつて情があつ
 て心切者で慈悲が深く、そして貴方、堪らぬ勇肌が
 あるンですもの、誰が田舎者と見ますンか、おそらく
 妾の亭主として國へ連れて歸つても恥かしくなからうと思
 つてるンです、妾も今までの十三人に抜き取られたから、
 寫眞は蜘蛛の巣が張つて着のみ着のま、何一個もありま

せんが、伯父が人車の三四臺も持つて下谷に帳場をして
 居ますから、さアといやア五圓や七圓は出してくれませ
 うさ、それに八九圓も足して十五圓ありやア世帯も持て
 るから、こゝが一生懸命の瀬戸際、三尺港でゑンやらさ
 アの岩角でさア、ですがね、肝要の男の心が未だ確然と
 分りませんから苦勞するンですよ、なるほど、此間も淺
 草の觀音様へ參詣したつて、あの寫眞を取て來てくれま
 したあア、同じ家に居ても目が多くつて自由にならぬ
 し、また人の嫉妬怨恨といふもなア怖いから、暫時の間
 だア、二人とも辛抱して居べい、もし顔が見たかア何時
 でも其寫眞を出して見るといふのですから、まんざら悪
 くもないと見へます、ねエ貴方、惚れない女に自分の寫
 眞あぞを呉れる譯なもんぢやアありますまいよ、そこで

妾も一番うんと乗氣になつて、たつた十三人ぢやア女子
 に生れた甲斐もないが、まア此人を男の喰取めとして、
 いよ／＼彼男で身を固める覺悟なんです、行末うまく往
 きませうかね、なに賣卜者ぢやアあ、御道理さま、こ
 れは失敬申しました、では貴方、かう打明けて言はれた
 のが災難で、なんかの縁と思つて蔭ながら二人の事を祈
 つて下さいな、たのんますよ貴方、おゝ急しい、三番の
 間に當つたればこそ、もし運が悪くて最後に廻らうも
 ならず、すく曉方になつて足袋屋の看板、あの男と泣別れ
 になつたかも知れせんワ、さやうなら、
 おさん大明神、またもや歸りかけの庭の飛石に躓いて、大道
 日の出尻と轉びけむ、鷲鳥に似たる泣聲しぼつて、さや
 アと叫びし後より入來りし第四番は、年をろ十七八、そこが

美人と取立て、いふべき節もなければ、すべての容体すらも
 と伸びて麗はしく、色は眞白といはむより自然の垢ぬけに艶
 を含んで、髪は毛くろく、と解かば身丈にも餘らむを、島田
 は人目に立ちて嫌とやら、わざと小さう差控えての新蝶々を、
 色好みの餘所目には嘘や懸知らずと惜むらん、起居振舞まど
 やかに態どならぬ風情を添へて、見苦しからぬと天生の麗質
 には劣りし衣裳の古模様、たゞ家にあるまゝを今に用ひて粧
 ひながら、あはれ年頃の娘氣に世上の華と見比べつゝ、お
 く昔々のふの袖の露、人知れぬ夜半の涙に口惜しき事をと
 泣きやせむ、されば飛鳥おとせし十年前の榮華を夢と見て幽
 かに暮す人の子らしく、さりとて古河に絶えぬ水は流れて、
 まだ衣食の飢には迫らぬ舊家の秘藏、この娘一人に婿とるま
 では残る小道具賣拂ふてなりとも、孤城落日を支えたる親の

苦勞は一入あるべし、

第四番

妾のやうな女でも、お嫁にさへ仕てくださいます方あら、
 兩親とも相談の上、どこへでもまいります——いえ、
 決して男撰びの、また思ふ人の、そんな、世間のお娘
 様方と違つて、そんな、お耻かしい氣儘なぞを申される
 身分では御坐いませんから、御縁さへありやア、きつと
 其お人を大切にいたします、それども萬一、もし叶ひま
 すなら、妾の身よりも、外に同胞も何にも御坐いません
 から、いッそ兩親に目をかけて下さいます方を——父
 が常々申聞けますには、お金といふもの幾何あつても貢
 乏する時はするもので、また、そんな貢しい暮をしても
 人は運と働き次第で善くもなれるから、決して家庫なぞ

に目をつけるな、第一が男振より心振が肝要で、世間体
 えッかりして内心やさしい氣立でさへありやア、生涯苦
 勞しても手前の徳だからツて、こんなになに申しますから、
 妾も、今の身分に過ぎた方よりは、てうと似合の人を、
 誰彼が御覽なすツても、あまり目立ない夫婦だと、いは
 れたう御坐います、
 なんとなく哀れにいらしき此娘、あくまで其身を卑下して
 世に恥づるが如く見ゆれども、さすがに昔の家筋を思ふて心
 かるく、しう持たず、結局どこやらに鼻先の智恵ならぬ奥床
 しさ、歸りがけの挨拶さへ柔和に女らしう、えづかに立去る
 影を燈火照して見送れば、また振返つて慰撫に會釋する折し
 も、足取活潑に入來る第五番は、毛糸の肩掛に學問の外なる
 御手際の自慢まづ怖ろしく、がす糸織の書生羽織に同じ柄柄

の綿入一重、肌には何を召すらむ、この冬空に嘘やお寒からうといへば、いえ何ともあいのよ、餘計なお世話様といひたげの面色、洗ふて磨けば、まんざら捨てた物でもなければ、い何分にも多年の間むづかしき道理に責められ玉ひしかば、いづしか目付口元鼻筋も父母の譲りと違ふて、怒れば忽ち喰付さうなる險しな鋭さ、もとより頭髪は文明ぶりの大束髪、それも優形の美人が黒漆のやうなる髪ならば、また一際の高尙優美を添て懐かしけれど、頭髪をアアでも宜いの、第一うるさくツて堪らないよと宜ふ上は是非もなき形となつて、さながら七月の井戸替にたぐりあげたる釣瓶繩の如し、年は十八九、或は二十歳にも届かむか、二十一二にもならむか、日夜吹出る智慧にからまれて人間の年齢なを確と分らず、うすッべらの反返りし唇を一文宇に引て、ゆるみかゝりし向

鼻緒に足の指の力加減、左手の風呂敷包は問はで知るべき六箱三疊、右の手を胸帯の間に入れて自然に備はる体操の身振、腰骨をヤッさり踏伸しあがら、戸口に立止まつて四邊見廻し、御免下さいといふ掛聲も弱からず、やがて入來つて坐につくや否や無言の一禮、忽ち懐中より一葉の名刺を差出して、此時やうく始めて笑を漏しぬ、さても今時の女學生といふもの、こんな御人体あればこそ國粹保存の古流家に卑められ、西洋がへりの紳士才物にさへ爪弾きせられて、大道讀賣の乞食せぬが勝の女壯士とまでいはるゝを思へば、似て非なるものほ世に罪深きはなく、これを實に獅子身中の虫ともいふべきか、味方だはしの糞味方の違つた勝負の引替しに逢ふては真正の女學生こそ氣の毒あれ、

いづれ妻も女と生れたかぎり、せうせ良人を持ちます
 がね、古來因襲の久しき東洋流の蠻風をうけて、百年昔
 樂倚他人あつかひといふ、なまじない、口惜しい、淺まし
 い、劣等なる獸慾の犠牲物たる事は嫌ですから、願くば
 女の愛の露を吸収して人間生活の靈藥と信ずる人、いや、
 それはとでなくとも、せめて男女同等の天分を辨えて、
 婦人は決して男子の玩弄物でないといふ位の人でなければ
 ず、眞平です、御免蒙ります、断じて其男に良人たる名
 稱を捧げられせんワ、乃ち少くとも肉体の快樂を以て
 情交綿々の快樂に代え得るだけの覺悟、ぢやアない、眞
 正の信實なくんば嫌ですワ、嫌ばかりぢやアない、たと
 ひ假に強て彼が妻となつて違つてもさ、逆も無効です、
 なせつて貴方、駈れた器には方圓に剛が氷でも保ち得
 ませんもの、ですから、妻あつかア身を重んじて今まば
 し此まゝで押通す心算なの、いはゆる嫁期とか年頃とか
 いふ譯の分らない人爲の期限に迫られて、かるくしう
 大切の生涯を一朝に誤りたくないのです、もしまた希望
 の上から言ひましたら、せうせ封建時代の舊慣が依然と
 して頭腦の中にある兩親の目で、これが宜からう、苟く
 も我女の生命を托する良人を撰ぶに、宜からう位の薄弱
 な思慮から見立た人は、や、新鮮の空氣に育つた妻の氣
 に入らず、また先の氣にも入りませんから、これは先
 づ固よりの無効として、こゝに妻が撰ぶ、撰擇といはむ
 より意氣相投して互ひに一塊の肉となるべき一人の男で
 すね、その男は体格の立派な有髯の美丈夫で、心は珠王
 の如き玲瓏の愛を滿身に湛えて、そして充分文明の高等

いづれ妻も女と生れたかぎり、せうせ良人を持ちます
 がね、古來因襲の久しき東洋流の蠻風をうけて、百年昔
 樂倚他人あつかひといふ、なまじない、口惜しい、淺まし
 い、劣等なる獸慾の犠牲物たる事は嫌ですから、願くば
 女の愛の露を吸収して人間生活の靈藥と信ずる人、いや、
 それはとでなくとも、せめて男女同等の天分を辨えて、
 婦人は決して男子の玩弄物でないといふ位の人でなければ
 ず、眞平です、御免蒙ります、断じて其男に良人たる名
 稱を捧げられせんワ、乃ち少くとも肉体の快樂を以て
 情交綿々の快樂に代え得るだけの覺悟、ぢやアない、眞
 正の信實なくんば嫌ですワ、嫌ばかりぢやアない、たと
 ひ假に強て彼が妻となつて違つてもさ、逆も無効です、
 なせつて貴方、駈れた器には方圓に剛が氷でも保ち得

教育ある人が希望です、職業の點は別に撰びませんが、もし前途に多望なる外交官かなンかでありやアなは潔好です、無論、財産も多きを願ひませんが、今日社會の定度からいへば、いつも自用人車の綱曳で少しの暇もないといふ人、ですから一歩すゝめば忽ち馬車に乗るものと思つて下さいよ、家は和洋折衷なぞと、そんな未練らしこのことを言はずに純然なる歐羅巴風の建築で、生活も凡て彼地の通り、たまに良人の閑暇でもある時は、互ひに手を取つて公園なンかを散歩して、いつも新しい暖かい情交を樂しう受けて暮したいです、ですから、これを扶け之を慰むる妻がなけりやア、この良人たる人も今の劇職に堪えられおいと云ひ、また妻も此良人なくんば、女としての美を充分に發揮されないので、一の大なる幸福は

常に二人の間を圓滿靜淑の宿として居るンです、
 や貴方ひといことね、夢ぢやアないンですよ、眞實に然様おもつてるンですから、
 神を良人に持ちたいと言はざりしは殊勝なれども、身の程を知らぬ女の寒齋、みだりに高く舞上つて方角を失ひしま、
 下また自己の外に婦人なしとや思ひけむ、直ちに國家の盛衰を荷ふべき外交官を撰んで獨極の令夫人、うやむやの空中に歐羅巴風の大建築を企て、まかも有聲の美丈夫でなくんば嫌、玲瓏たる珠玉の如き満身の愛をもて我を迎へずんば、決して輕々しう妻になンかなつて遣らないよと、宛がら天女の下界に降つて人間に嫁するが如き御託宣、それも一世に秀で高等の教育を受けし女學生ならば知らぬこと、但し人品を欠け

これか、
 一、
 一、

ども位置相應の家いかにに生れし女おんなならば知らぬこと、かゝる生なま
 問まの端はを嚙かつて毛け糸いとの肩かた掛かがす織オリの綿わた入い一枚まいで二十にじゅう齡ねを越こ
 まで体た操さ身み振ひに彷彿ふたふたく女おんなの身みとして、づうくしくも念ねん頭とう常じょう
 に斯かる大だい望ぼうを抱かかりては、憫あはれひべし殆ほとんど癡ち狂きやう院いんの物ものたるを
 免まれざるべし、かつその去さる時ときに臨までは天あま晴はれ大だい議ぎ論ろんを吐はた
 りといふ勢いきほひ身みの先まにふらついで、田の舎や芝しば居いの六ろく方ほう踏ふむが如ごと
 く、ピンズヤンとして出で行いきしまゝ待まちてともく其その次つぎの來きら
 ぬを、何なに故ゆゑぞと燈あかり火ひかゝげて障かざり子こ引ひ開ひらければ、いつの程ほどにか操さ
 端はに一封いっとうの女おんな書がきありて、第六だいろく番ばんと記しせる觀くわん世せ捨しゃの圖ずを添そえた

第六番

御ごめもじの上うへにて思おもふ男おとこの事ことを申まを上しやう候こうは何なにとやら面おも恥ぢ氣き
 に存ぞんじ候こうまゝ、あらく拙つと筆ひつにいはせまいらせ候こう、言こと

葉はの足あらぬどころは幾いく重じゆうにも御ご判はんじ下くだされたく念ねんじ上じやう候こう
 さて妾めかけこと幼こ少せうの頃ころに父ちちを喪なくひ候こうへとも、母ははは聊ちやうか筋すぢ目め
 よき家いへよりまいり候こうものにて、幸さいひ里さと方ほうを力ちから草くさに母はは子こ二に
 人ひとやうく人ひと並ならに暮くし居い候こううち、四年よねん以前いぜんに母ははの里さと兄あにも
 死し去しいたし候こう後は、たゞ親おや類るいと申まをす名なばかりにて、いつ
 どなう往い來らいも絶たへに頼たのみも薄うすく、さりとて外ほかに世よ渡わたる道みち
 も辨わえす候こうへば、いろく涙なみだをまぼり候こう上うへにて、覺おぼ束たす
 ながら妾めかけの身みに習おぼ覺おぼえ候こう挿さ花はな抹ま茶ちやの外ほかに琴ことの一曲いっしやくを鬼おにも
 角かくも身み過あの業わざといたし候こうもの、かりにも身みのためために學まな
 びし儘ままかの藝ぎもて其その日ひを送おくる飯いの種たねに致いたし候こうはんどは、
 夢ゆめさらく思おもひもよらぬ事ことと今いま更さら悲かなしく口くち惜しき事ことに
 存ぞんじ候こう、かつは妾めかけも其その時ときやうく十九じゅうきゅうにて候こうへば一いっ入に耻ぢ
 かしう存ぞんじ候こう、さりながら人ひとは物ものに馴な易やすきものにて、こ

とし二十三の唯今にては、さして始めはどの辛き思ひも
なく、たゞ淺ましき理木の身と歸り候うちにも、いつま
で行末かくて獨身にもまいりかね候まゝ、人しれず身に
相應の縁もがなと、よりくの便りに餘所ながら心掛け
居候、それにつき斯く申上候は何とやら遊葉の得意顔に
も聞え候へども、これまで四年の間に不束の妾をも女と
思召され候てや、かれこれ仰せ下され候方は凡そ十餘人
もおはし候ひしが、いづれも下世話に申す長し短かき縁
にて、中には位高き御方に唯一時の花と詠められ候氣遣
もありて、かたゞ母も妾も共に情まらすの名を唄は
れまいり候今更ら、なまじひの榮華も好もしからず、さ
りどて餘り卑しき處へも行難く、はとく困じ果候折柄、
翠の指南いたし候弟子達のうちの兄御にて、去年の春、

英國より歸朝いたされ候方お年は三十一とやら、いつの
まに妾を御覽せられ候や、人の掛橋もて頼りに言寄られ
候へども、はやく我國の學士號をうけられ候上なは大學
院の業をも卒て洋行遊ばされ、また新にかすくの名譽
を荷ふて歸朝いたされ候へば、旭の御勢ひ近きうち高官
にも上られ候はどの風聞ある方様へ、何事の心得もなき
日蔭女の妾風情は、よしや一時の御氣に入り候ども、所
詮行末までの思召に叶ひまじき事と諦め、言葉の行違な
きやう其よし妹御へ直接に御返事いたし候處、何故にや
以前にまして重ねく俄かの御申越に、あまり勿体なき
はどの仰せ、もどより妾も唯この身を賤しめての御返事
にて、眞實内心なんばうか嬉しき幸福に御坐候へば、御
情の切なきに我を忘れて果は耻かしながら此方より思ひ

も慕り候折節、なんの怨恨ありての事に候や、ある新聞紙上に互ひの間を事々しう書立てられ候、それも唯ありのまゝに筆を加えて面白う書かれ候懸のみならば、いまだ清き身の何の觸りも御坐なく候へども、かなしや妾を今に始めぬ高等地獄とやらに言任せ、また其方様を洋行歸りの自墮落紳士とまで書落して、互ひに賤しき汚はしき獸の野合めいたるやうに、それはく身も世もあらぬはどの口惜しき冤罪を着せられ候段々、懼りながら御あはれみ下されたく候、それにつき妾の身に思ひ當り候事は、これまで四年の間に折角の御情を餘所くしうせし十餘人の人達より、ならぬ懸の仇とやらを報はれ候かと存じ候外は更に何の心附もなく候へども、彼方様の身に取られては借も深き故陣を聞及び申し候、それは曾て大

學院より洋行なされ候時、ある高官の御老輩にて取別け御世話遊ばされ候上、今度の歸朝を待受けて我嬢様を娶せ、なほも一入に取持たむものと思込まれ候委細の事を、かねてより羨ましく妬ましく心得候人々が、おりしも妾の事を伴伴に斯る謀企の穴に突入れて、何事も打破り候上その御出世を防がむどの野心に外ならじと、承り候時の妾の悲しき辛さ腹立しき、我身の無念も打忘れて唯々御氣毒に堪ず候、さうあがら、それはとまでの義理合かつは萬事の御都合よき幸運を振捨て、わさく賤しき妾風情を斯程に思召され候事、今更のやうに嬉しく勿体なく冥加れそろしく、その御心のみにて妾一身の本望に御坐候まゝ、あらためて思ひさき遊ばされ候やう、まみ御意見申上候へども、世の隙にいふ悪縁ふかしとや

ら、彼方様の仰せられ候には、たゞ世間に如何なる悪名を囃さるゝとも、身に聞かれば更に疾しき事もなきのみか、もはや彼新聞上にて老官の意を損ねし上からは、官途につく事を断念すべく、よしや老官の疑念を解くに足るども、元來わが好まざる女に生涯を契るべくもあらず、第一が娘の縁にて其父の威を借りたりなんぞ沙汰せられては、これまで苦勞せし多年の學問も一朝に潰れて男と生れし甲斐もなし、さればこれを幸に仕官を思切り民間の業を取るべし、むしろ民の血をもて衣食するは學者の耻づるところなりとの仰せにて、いよく其後は妾の身を捨て玉はず、一時も早く結婚の式をあげて日本國中の新聞紙上へ廣告せむとまで、さても勇ましき健氣の思召に妾も蘇生りし心地いたし候まゝ、近きうちに改

めて相應の媒酌を撰び、不束女が僥倖の良人を持つ事と相成候、さやうに候へば、妾の一身は此良人のために生死の境より拾はれ候事に御座候故、おのれやれ、及ばすながら良人に事ふる妻たるの道は、生命に代ても仕終せ候て、高等地獄とやらに妻いかやうの貞節を守り候や、また自墮落者といはれし良人が、さればその身持にて生涯を終り候や、口善悪なき世上を相手に夫婦とも心合せて此世を渡るべき覺悟に御坐候、いづれ結婚の上は改めて御たづね申上げ、猶いらくの御指圖をも願ひあげまいらせ候、あらくかしこ、

走書しりぞきの筆ふでも優ましう言葉ことばに哀あはれを合あみて、とこまでも静しずかに女らしけれど、凛りんとして犯とがすべからざる男勝おとこりの一際ひととき、さては物の道理ことわりを辿たどりて根強ねがき心の一節ひととぎ、かるくしう身みを持たず、

うかゝと世上の風に華を散らす、我身一個は飽くまで我
 身一個に取捌いて、顔色にも出さぬ心の高く打上りたる風情、
 人品のほほを想ひやられて其面影しきりに見たく、またこれ
 は世の女を見出して運添ふべき良人、まかも自己が一朝の幸
 運を捨て、世の耳目を敵としながら、眞實の愛と情を肩にし
 て添遂げむとする良人こそ、骨まで響しき心地せられて奥床
 しく、それを西洋歸りの新らしき當世紳士とは猶更いよ
 美はしく、これ等を眞實の道に叶ひし自由結婚ともいふべき
 か、斯る良人と斯る妻とが手を携えて樂しげに歩む姿を、か
 の眞先の曲みし女學生に見せてやりたく、せめて其足跡なり
 ども踏ませてやりたきものぞ、同じ女に生れながら黑白妍
 醜の差別に驚く折しも、入來りし第七番は年紀二十一二、身
 に纏ふ衣裳の嗜好は只管ら時の流行を逐ふて、賤しけれども

華奢の屈かぬ隈もなく、顔立は世にいふ十人並ながら、色
 白さを一徳として日夜不斷に磨きたてたる手入物、されば本
 來の木地より數倍の美人らしく、身の取扱ひ愛嬌專一に人の
 氣を汲みて、呵しからぬ事にも笑を含み、樂しからぬ事も我
 から樂しげに持掛けて、頭りに浮世の情に買はれむとする風
 情、さりとて幼少より氣儘氣隨に育ちたる身の境涯は、おの
 づから年と共に根性骨を横に太らして、我心の進まぬ方には
 罪なき人をも仇の如く思ひ、恩義ある人の影口悪口さらば
 しいども思はず、諸事すべて眼前の利害得失、それも眞の利
 害得失を計るの思慮なく、たゞ指先の小器用に糊付細工をす
 るが如く、ちよこゝと一時まのぎの繼足思案に、永の生涯
 を夢ぢやゝと送りたき顔色、おもふに横町の新道に御神燈
 の影くらきところ浮世の狼どもを集めて、清元常盤津などの

師匠といふものなるべし。

第七番

ねエ貴方、凡そ世の中に女くらしい、つまらないものはな
いと思ひますよ、また妻なんかア亭主の味を知りません
が、いろんな知合の家を見ますに、大定、女房は朝の闇
いうちから起きてさ、襦衣のまゝでお飯の用意、櫛がけ
に雑巾と箆を持って掃たり拭たり拂つたり、前夜の仕舞
事から今朝の膳立から、近處隣家の挨拶やら井戸端の附
合やら、一人で八人分の忙しいのも構はずに、奴さんは
寝床の中から鎌首もったて、煙草盆の火がないと吐鳴
るを機会に、さんざ朝ッばらから御託を吐た上、ヤツと
の車で起上るとン、湯を取れの、いや茶がぬるいの、着
の洗ひやうが足りないの、なせ手前は其様に白痴なの、

うンてそれがンだのと、横町の隠居さんに手を合して拜ん
だ三年おとの事も忘れてさ、早く苦歌張つて仕舞へば宜
いと言はないばかりに、御大層な顔をして朝のお飯が済
むと、其儘ふいと飛出して夕方ぼんやり歸るが最後、ま
た膳の上の一杯から夜の十二時ころまで泥酔を極込で、
それを彼是いやア料理屋で高い酒を飲ひし、おまけに女
色でも出来て御覽なさい、まるで女房を人間の取扱しな
いんですもの、一言目にやア手荒赤真似をして、男の働
きだどさへ言やアお仕舞さ、それにまた子でもありやア
猶更の往生、年が年中ぼろを下げて泣の涙で暮すところ
か、なんかいふと直ぐに三行半、去つた出て行けの一點
張で押されちやア貴方かわいさうに女ですもの、それも
二十歳前後から知らんこと、さんざ世帯じみた大年増と

来てから、どうせ二度目の縁に面白い筈はあしき、今までの苦勞や子に引かされて、身を切られるほど口惜くつても口ぢやア兎も角も世間の手前、悪う御坐いましたど一度うたつたら、もう叶はあいです、奴さん愈々増長して踏んだり蹴たりは常の事、お婆さんになつて腰でも曲らなけやア逆も息がつけないンですから、妾は亭主と極めた人を生涯持たない覺悟なの、なアに貴方、亭主が無くつても充分たつて行きますさ、男も女も同じ人間で、夫婦と名が付けやア其日から差引き勘定の合はない損ばかりして堪りますものか、それよりやア、自分で自分の勤さをして、すいた男を幾何でも時々どツかえるが第一でさア、また男といふものア妙にオホ、貴方の前ですが、いちの汚いもンですから、此方から好たでもなし

嫌でもないやうに持掛けるど、やたらに上氣わがッて糸目の切れた奴風、そこまで飛ぶか知れませんよ、そこでまア平ッたく言やア、男妾を持つくらいに勢で、まかし後家さんが俳優狂ひするやうに此方から入揚げちやア舞臺が毀れますから、うまく絞なして、敵にお荷物を荷がせるンですよ、あんの事アない、月々いくらかの入費を貰つて男妾にしてやるンですア、亭主なんかア嫌なこと、この自由な世界で誰が男一人の持物なんかになるンですか馬鹿くしい、もンがアぢやあるまいし、氣のきいた化物に笑はれますア、ねエ貴方、憫むべし此女の目は斯る境涯に限られて心は斯る境涯の外を知らず、さればとて教えむとすれば皮肉を通して骨に焦付たる女の悪業なかくに度し難く、翌の日ありとも知らぬ眼前

の花に躍り狂ふて、良人に叱らるゝ世上の妻の愚かさを笑ひながら、おのが身の果に古三味線を抱えて人の門邊に立ち、嫩枯れたる聲を統りて一文二文の手のうちに老の露命を繋ぐとも思はねば、果敢あき色を萬年にたのみて飽くまで心強く、尻輕の帯際ひよこくと振つて立去りしあとより、引違えて入來りし第八番は、おなじ束髪なれど出來損ひの女學生にはあらず、巻揚げし髪の毛の艶々さ、首筋元すつと伸びて生際にあらず、香味を帯びたる、さては琉球紬の重襪に長襦袢の襟模様も晴がましさを嫌ひ、わざと京染の本檜榔を幾度もかけし黒縮緬の綿入羽織ぼつとりと重く、一本ぐるみ唐襦子の丸帯ぎゆうと邪慳に引えめて、目鼻立は中の部あれど、物越の思ひきつたる体に萬事の人品を打上げて、年頃は二十四五、これで今まで定まる男のなかりしは何故ぞと、第一の不審は先づ

斯女の關所あり、身分は何れか高等女學校へ勤むる教師として、は意氣に過ぎ、花柳の巷より浮びし女として、は愛嬌に乏しく、さりどて然るべき身分の令嬢にもあらず、固より商家の奥に育ちし秘藏にもあらず、眉と目の間に浮世馴れたる色たしかに見ゆ、

第八番

妾の家は宿屋で御坐います、おかげ様で世間へも知らずいふん立派な方ばかり入りしやいますもの、さて貴方、男の中に男が、さかしまかした彼方では女の中、女がないと仰しやいませうオホ、いませう、妾さ、かには決して男撰びの出來る身分では御坐いませんが、まだ極らない内は誰も希望の大きいもので、ね、二貴

方、自分の顔と相談もしないでさ、いろんな贅澤が起ります。ますよ、常に親共が申しますには、逆もお前のやうな氣儘女ぢやア此營業の跡を嗣げないから、早く相應の縁を目ツけて分家でもしろと、喧しく言はれますもの、差當り其縁がなくって今だに獨身で居ります、ですが妾だって、さう無理な希望をいふのでは御坐いませぬの、實は多年の家業柄で種々の方にお交際申して、また其方々が人の知れないお浮氣筋なぞを、よっく存じて居りますから、なんだか危険で、男は油断のならないものは無いと思ひますよ、なせって貴方、お國では何の某といはれる紳士紳商達や、また御役人なら假にも一縣の知事様ぐらいの方で、名譽とか品行とか、四方八方むづかしい中で喧しい事ばかり仰えやる方でも、さア土地を放れ

て旅へ御越になると貴方、無効ですよ、いや藝者だの何だの、御用は三分で御保養が七分、夜の目も寝ないでお騒ぎなさいますのを、お氣毒なは國本の奥様で御坐いますよ、なんにも御存じないから、暑い寒いにつけての御心配、時候にお負け遊ばさないやう、また災難お怪儀のないやう、あまり御用が多くて御持病が出はしないかと、獨りで御苦勞なすつても、その旦那様は、これですもの、病氣をこるが生命の洗濯さんさ遊ばして、御身分が善ければ宜いだけ、男振が御立派なら御立派だけに、女といふもの、苦勞を増しますから、妾は決して御身分や男振などを望みませんの、たゞ上と下の婢女を二人も使つて、雨が降つても傘と下駄の入らぬ、町の洗濯へは行かない位の境遇で、三歳か四歳はと年上の方でさへ

ありやア潔好で御座います、もし旅へでも往ッしやる事
 があれば、どうして貴方、お一人で遣つて堪りますもの
 か、きつと妾が附添てまいりますワ、せんたい男の浮氣
 は旅から病付くもンですから
 流石は上等旅館の二十歳を越えし娘だけに、物馴れたる目よ
 り人間の裏道を差覗いて、妙に悟つたらしき言葉の端々、身
 分の高きも取らず男振の美きをも撰ばず、湯殿を廊下傳ひに
 構えて雨天に傘と下駄と入らぬほどの男を持ちたしとは、さ
 ても浮世の皮肉を穿ちたるかな、されど此女は大の嫉妬と見
 えて、深く男の浮氣を恐れつゝ、決して一人旅には出さぬと
 いふ目付の勢ひ、情が過ぎて時に恐ろしき事もあらむか、つ
 いて第九番に現はれたるは年紀やうく十六ばかりにて、
 世にいふ瓜實顔の色白、おしなべて内氣の性質に多しといへ

ど、目鼻の道具あらくて身振しやんどせし風情は、どこやら
 外観によらぬ勝氣を備えて、まかも年には過ぎたる顔際の晴
 々しさ、爪端の洗ひ磨きも思ひの外に行届いて、不斷着なが
 ら絹布の身に添ふたる着慣、おろく眉毛を動かして人を視
 る目の働さやう、片頬の笑の入れやうまで氣を込めて態どら
 しき体、おもふに尋常者の娘にあらず、もしその人品風俗よ
 り推せば、父は本場の中位を占むる投機商にて、母は其むか
 し全盛を極めし藝妓なるべし、

第九番

妾はね、俳優なにかより外の藝人が好きですワ、俳優は
 舞臺顔が幾何きれいでも、あんまり素顔に善いのは無い
 し、そとして一生、身が持てなくって薄情ですから、それ
 よりやア義太夫かなンかで、聲の美しい節の上手な艶物語

りで、そこへ出しても耻かしくない人をねエ、同じ藝人也も落語家なンさア嫌あこと、高坐へ上つて妙な顔をしてべこ〜お低頭ばかりしてさ、あれでも妻女があるかと思ふと呵しいですよ、もし妻女が聴きに來て居たら何と思ひませう、さまりが悪くツて顔が眞赤になりませうねエ、また期間も大きらいですワ、妾のお父様が勝負にする期間で、いつも家へ來ますがね、お酒の相手をしあがら何だか頻りにお饒舌をして居るかと思ふと、おろ〜お父様に頭上を、びしやアりと叩かれてさ、そして怒りもしさいで、げら〜笑ツてるンですよ、ですから藝人は義太夫に限ると思ひますワ、立派な上下で高筒袴の見盛を扣えて、三味線弾を連れて、かういふ鹽梅に反身で人を見下しながら、第一、男らしくツて眞目があつて見

醒がしませんよ、それに年が若クツて美男でもあらうもンなら、センなに宜いでせう
 年いまだ二八にして心は既に道樂藝妓の帯際とつて引戻すべき勢ひ、まことに父が浮雲の富に育ちて胎内より母の氣をうけしといふべし、恐らくは淨瑠璃文句の道行を其まゝ、悪性太夫の喰物どなつて身を潰すのみか、親の身代まで潰すは斯る類に多からむと、差違えて迎えし第十番は、わけて女に忌はしき溝割額の薄眉毛、耳小さく鼻大きく、頬の平たき唇の厚き、まかも齒並の亂抗まばらに頤の骨尖りて細く、多年の貧苦に責められたる目附さよる〜、そこらに物の落ちたるを拾はむとするが如く、皮肉の乾きし手足さん〜に荒れて、身には古布子の一枚着それも洗ひ張りの着替に乏しければ、みすばらしげに垢づきて動けば、一種の惡臭ふんど鼻を穿ち、

料れたる双子の前垂も雑巾がはりか膝前かくしか、時には霜
 夜の燒薯を包む風呂敷もならむ、鼠色の足袋に指先の現は
 れたる裏底の眞黒なる、頭の結び髪に綿屑の塗れたるを思へ
 ば、いづれかの紡績會社へ通ふ職工なるべし、年頃は二十三
 四、たどひ苦勞にふけたりと雖も、二十一の關は必ず超し
 なるべし、

第十番

お金ですワ、金のことく、お金さへありやア、ねエ旦那、さう思ひますよ、眞實に、さみく、さう思ひますよ、世の中に金は金のある人なら一服でも跛足でも何でも如でも亭主に持ちます、たどひ不具でも天刑病でも、金さへありやア此世の極樂ですから、年中うまい食を喰つて美しい物を着てさ、芝居は御座れ寄席は御坐れ、

生涯すいた眞似が出来ますもの、わたしやア男より金が持ちたいの、なアに家に居る亭主が、どんな野郎だか世間の人に知れやアしませんもの、三枚重ねで吾妻コートを着て、高臺の人車で金の指輪を挿めてさ、ほんとに、じれつたいよ、金といふが自由にならあいかから、金さへ自由になりやア五年の生命が三年に縮まっても構ひませんワ、ねエ旦那、千圓の利足は月に幾何程くるもンでせう、念のため教えて下さい、さしやうですから、あはれや生涯を契る良人よりも天下湧物の金に心を奪はれて、思ひきつたる生命の關の山が金千圓、その利足が幾何はとぞと、女一代の榮華を僅か千圓に足るものと思へる淺ましさ、十圓札の五枚も遣れば白晝の大道に丸裸となつて躍る段か、逆様に突立つて目をまはすべき惘然に引替え、第十一番に入

来りしは總身に金色の光輝を放つ令嬢、父御は一國の多額納
 税者として貴族院の議員にもあるべき家柄に育ちて、世の中の
 貧乏人といふもの五合辨に一杯はどの小判も持つまいかと、
 眉を翹めて侍婢に私語さし昔し長者の娘も斯くやあらむと思
 ふばかりの風俗、身に飾る衣裳の善美をいふは蛇足なり、年
 は十七八なれど心は世上の十四五にも劣りて、客色は思ひの
 外に下れども、まばゆき全身の盛粧に照されて目鼻立しかど
 分らず、

第十一章

妾は田舎源氏の光氏様のやうなお方を持つて、紫のやう
 になりたいの、いくら性悪を遊ばしても、二葉様は前に
 お死去なすつたし、眞實のお情は妾一人にあつてねえ、
 そして外の方は、ほんの其時の御戯事ですもの、たゞ氣

にかゝるは、もし須磨明石に、駒の爪と呼ぶ庭下駄を直
 して岡部の家まで御口取する千鳥のやうな、憎い掛橋が
 あらうかと、それが心配で御座いますワ

おもふに近隣の長者殿が秘藏娘、父に伴はれて東京の假住居
 もまだ一二年なれば、すべて田舎氣質の大盡生育に、隙間も
 る浮世の風を恐れて深窓の奥に養ひ、夢にも當世の教育にか
 けぬ古流の一粒撰なるべし、されば田舎源氏も活版の翻刻物
 にはあらで、家に藏せる草紙本に始めて人知れぬ春情を運び
 つ、まづけき庭に花の小影の蝶を忍びしならむ、真事の風
 情ういしく何の罪もなうて一種の愛嬌ありといは、いふ
 べきも、宛がら京人形に衣裳を着せし昔の残物、もし父の七
 光なくば、これを賣れ口よりも賣る口の手数物なるべし、そ
 れに引替え入来りし第十二番は、いぎりす巻とやらいふ東

に、身のまはりの小道具一切すべての色取は、西の洋より吹
 来る風に育てども、種は正しく日本流の芽生こゝに成長して
 二十一、前の第五番に現はれたる女學生とは物の風情を異
 にして、おちつきたる容体、いやしからぬ振方、内は心の思
 慮に我を睡みて、小袖の重着に一入の優美を添えたる品形、
 薔薇の一輪を青磁の花瓶にいけたらむが如く、いはゞ肥馬輕
 車に乗る官人の娘にて、なほ學びの窓に飽足らぬ高等の女學
 生、よしや業を卒ゆるとも其業もて衣食の道に立つ人品にて
 はあらざるべし、

第十二番

また妾は修行中で、こんなな身体ばかり人並で御座いま
 すが、心は充分に一人前の發達いたしませんから、とて
 も自分の境遇と性質に叶つた良人を見ることが出来ませ

んよ、まかし、人間の希望といふものが常に妾を促がし
 て、せんなのが宜いと問はれます毎に、その答だけは、
 不斷に心掛けて居りますから、誠に申上げて見ませう
 か——幸ひ妾の父は當時相應の官を勤めて、社會の表
 面にも立つて居りますから、むやみに道理のない頑固な
 事は申しませんで、お前が二十三にあるまでの教育、其
 他すべて親の子に對する本分は及ぶ限りに盡してやるか
 ら、その間に自分の氣に入つて世間へも耻かしくないは
 どの男を撰んで置け、まかし結婚に關する一切はお前の
 自由にもならないから、その邊は間違のないやう、たゞ
 意志と目的だけを附けて置けど、かう申しますから、も
 し妾が真正に見込んだ男で、妾の身にも叶ひ父の名譽にも
 相應の者でさへあれば、きつと——そこで妾が生涯を

托すべき良人には、いかなる人物が宜からうと、なるべく自分勝手の氣儘といふものを取退けて、眼前一時の浮華輕薄に流れないやう、眞面目に考えました末、及ばすながら妾には學者が適するだらうと思ひます、いえ單に學者では漠として何だか言葉が足りませんが、まア斯うで御座います、假令ば文學なり理化あり法律あり其外はまゝの専門を或學校の年限に卒て、そして其を直ちに社會へ買はれる働手よりは、まづかに社會の裏面を家として自分の死際を卒業期限とする人、いはゞ其専門のため、眞正純粹の學者で御座います、まかした教育に従事する學者とは別段の意味で、もし生活の道を求むるあらば、書物を著はして其専門のために至大の光明を放ち、少く

之れこそ
 今の世に
 希なるま
 の如く

とも後進を導くと共に將來發達の淵源となる位を、ほんどうの高尙な學者を良人に持ちたう御座います、妾は陣頭に立ち三軍を叱咤する勇猛の大將よりは、幃幄の内に関に勝敗を司る參謀官が、いッさう好きで御座いますから、どうしても門口の仕事師より奥の室で材料を與へる人の妻を驚ひますの、ですから、もし妾が思ふ通りの學者を良人に持てますなら、その良人は天下第一の醜男子でも構ひませんし、また世間の反對論者に幾何、苦められても、人生の貧苦に幾何、責められても、決して女々しい考を出さず、力の及ぶかぎり良人を慰めて、あくまで良人の勇氣を奮はせる覺悟で御座います、その専門のため一世の名利を捨て、著はした書物が、後世に傳はつて其道の人に感讀される時、嗚呼この學者の惨

恒たる腦を慰めた妻はど、もし貴方、妻のやうき女でも、
學問から放つ光明と共に欣慕せられる事があつたら、と
れはどの本望でせう

これはまた天晴れ磨きあげたる女學生はどあつて、父が時め
く官海榮華の飛沫に袖を濡さず、別に清く高き心を飽まで張
切つて、一代の指南車たる大學者を良人に祈る聲しさ、母と
しての他日をも想ひやられて慕はまゝ、しづく起て歸りゆ
く後姿を見れば、始め來し時よりも更に百倍まさる女振とぞ
なりぬ、それに引違へて下駄の音さへ慌たしう、げらく
ど高笑ひしながら入來る第十三番は、根から膝しき文盲野卑
の飛揚り女、まかも浮世の事には悪摺に摺切つて、片田舎の
酌女を三年はど仕上げたる風体、此頃やうく東京に舞戻
つて伯母さんの路次裏に巢を構え、いけもせぬ盤大面に朝夕

の紅白粉、焼ても直らぬ根性骨の横曲り、べんべら絹の染替
物を引張つて、三日の小遣錢になるならば尾羽うちからせし
寒呼鳥でも綱を張るの勢ひ、老て婆々となれば熊鷹眼に裏長
屋の鐵棒ひくべき踏張物、年の頃は儘かに二十六七なれども、
それを十八九に誤魔化さんとする辛氣辛苦の骨折は、いよく
狸の化損ひ呵しは過ぎて哀れなりける、

第十三番

おやく、貴方ア、どツかで御見掛け申したやうですワ、
なに、さうですか、そいぢやア妻の考違ひか知らん、ま
かし今晚は、どんだお邪魔様、
斯う見へても下司は大嫌ひですよ、はア幾何ら意氣な勇
肌でも、おんまり好きませんワ、また幾何お金が澤山あ
つてもさ、でくくした髯むちやの大男なんさア下さい

ませんワ、それよかア上品な大家の若旦那風が、ねエ貴
 方、色が白くツて優形で萬事おどおしくツて物に初心で、
 そして心底の眞實があつて柔和で内氣で、さうですれエ
 眉毛の濃い目のぱっちりとした鼻の高い口元の可愛らし
 い、なアにお父様が頑固でも鐵兜でも、肝要の本人さへ
 此方へ抱込みやア占めたるンでさア、それに第一母親と
 いふものが、糸の繰り次第どうにでもなりませんからね、
 其外、番頭なんかア白鼠でも黒鼠でも高が貴方、ひぢき
 と油揚げの惣菜で出来上つた代物ですもの、憚ンながら妾
 の腕に覺悟がありますから、三四遠くるくと逆様に振
 つて、めん喰はした上は二度と再び目口を開かすこつち
 やアさいですよ、そこで其若旦那を半歳ばかり咬え歩い
 て、さんざンばら樂んだ最後に、また半歳ばかり天の岩

論にも齒にもかゝらぬ泥板の悪跡女、退散くの聲をも待た
 戸の神隠れで、せツかの穴へ引込で仕舞てさ、すまアし
 た顔で高見の見物すると、さア大變です、親類評議やら
 賈ト者を呼ぶやら、いろんな大騒ぎを遣らかしても貴方、
 知れますまい、ところで妾が海嶺のやうになつた若旦那
 を連れて、ひよいと飛出すのが術で、せうせまた二月は
 かり摺た揉だの末、どいの結局が生命に代えられないと
 いふ落着で、妾が一足飛に大家の花嫁御様をンおもんで
 す、だから此に限らず、見込のない男にやア鼻も放掛け
 てやらないの、轉んでも空手は起きない覺悟で、泥でも
 宜いから兩手にまッかみ掴みますワ、よし其事がさ、始
 めッから思ひ通りに往かなくツても、十人を張つた中で
 一人出来りやア貴方、一割に當りますもの

す自己がいふだけの事いひ終つて、消て無くなりし其あとに
 現はれし第十四番は、すぎし昔の姿に浮世萬人の魂魄を引抜
 て、嘸や全盛せればこの罪のくつたぞと想はる、四十四五の
 女、あはれ萬木の花落ちて淋しき梢と我は見ながら、餘所目
 の春には猶も残んの色香を袖にとめて、まだ生命取の色艶
 たッふりと得ならぬ遅櫻、浮氣の中にも内心のままつた藝妓
 なんどの果なるべし、

第十四番

先生の前で斯な事を申し上げては、婆々の癖に生意氣な女
 だ、氣でも狂やアしあいかとの、お叱りも御座いませう
 が、まア妻の懺悔物語と思召して、どうか、ねエ
 妻は元來、賤しい家業を致した女で、いろんな殿達に長
 年の間お交際申しましたから、大定この男女の事は覺悟

も御坐いますし、また入組だ諸障あんども、よく存じて
 居りますもの、さて貴方、これが外の事と違つて、現
 在自分の畑になるとオホ、オホ、眞暗闇、まるで目先が
 見えかインですもの、だから今だに此年齢をして、萬一
 それ相應の縁でもありやア、あぞと
 から三十六の冬まで、二十一年藝妓家業を致しましたか
 ら、すいぶん古狸の株で御坐います、其間にお情をう
 けた方が都合十九人、また貴方、よほど確い中で御坐い
 ますよ、ですから、お蔭様で御最負の多かつた割には、
 不知情の評判を取た俵で御坐います、まかし其十九人も
 義理づくめやら遠引やら當坐の見てくれ一片で、眞寔ま
 んから自分の上氣たなア、たツた一人、ないもんで御坐
 いませう、そのかはり其一人にやア貴方、なか〜御話

しにならないほどの苦勞いたしましたよ、もしこれが素人の女で、あのくらい男のために苦勞なすつたら、それこそ貞女だの、いや操だのと、御大層な譽物になる筈ですが、悲しい事には根が浮氣家業ですから、なまじっか宜い笑物にあつて、結局の果にやア其男にも遣げられて仕舞つた器量の悪さ、實に馬鹿くしいッたら貴方、およそ世の中に此事は馬鹿を見るこたア、あるまいと思ひますッ、いちく先生方のお筆にでも乗らうもンなら、とんなに面白いでせう、お談話が枝葉に渡つて恐れ入ります、近ごろ先生方の御作を拜見いたしますに、おひく藝妓や女郎衆なンの事を、よくお書きなさいますやうですが、失禮ながら、みん無効です、無垢の地女は知らず、妾もの懸と情の遠方行方、取て放して放し

てまた取絞る鹽梅から、粹はと深い野暮の出来方なンア、逆も、あんな小兒めいた淺墓な事情ぢやア御坐いますせんよ、ですから妾なソの目から見ると、まるで方角が違つて、何だか妙に阿しう御坐いますッ、それでも先生方はオホ、オホ、すまアしたお顔で、色女の百人も苦勞さしたやうなお顔で、懸の諸譯の本家本元は此方だよ、まごついちやア不可など仰えやる勢ひ、熱病にでも、おかゝりなすつたんぢやアあるまいかと、お氣の毒千萬に存じますよオホ、オホ、おや妾とした事が、とんでもない、餘計なお饒舌をしてさ、です、四十五の婆々になつた今日、さんざ懲果た男を又と再び持つなンア、頭から詮聖の違つた事情ですが、先生よくお聞き下さいまし、こゝが浮世で、いくら身に不自由がなくッて

も、もう取る年の霜枯時に女の一人暮しは、何だか淋しくって心細いもんで御坐いますよ、其上に子はなし親類はなし、友達といつても今は何處に何うしてるか、よし知れたって水家業の昔馴染なンざア、猫の鼻より冷たいもので、あかの他人様の方が御相談相手にもなつて下さいますから、いッそ今の色氣のない時に、ヒッか相應の縁でもありやア、それこそ身代の持寄、杖つき乃の字の用意で、眞實の縁だから互ひの爲にもなり、また身の行末も悪かアあるまいと、實は斯うで御座います、年輩五十ばかりの獨身の方で、死だ妻女の子でもありやア酒更ら潔好、營業は何でも宜いから店倉の一軒もあるやうな、手確い處へ後妻に、ねエ貴方、どうせ花嫁ぢやアおさまりませんものオホ、まかし其人が御隠居では困りま

す、やはり自分の代で、若い時さんさ馬鹿を盡した夢の覺際、惜い事したと悔まない代りには、これから十年もッかり違つて取返さうといふ位な、達者な勢のある人を、希望なンですよ、もし御心當りでも御坐いましたら、どうか御世話を、いえ貴方、年寄の媒酌は後生の種になりませよ

海山の功を経たる四十女、年甲斐はどあつて花より團子の身になる注文、さりとて利慾一片に傾かぬ心を思へば、かゝる女の果として先づ上々吉の部、まして九十九の皺くちや婆々を百歳に一歳欠けたりとて、情しりと世に唄はれし昔男の目より見れば、なほ残るどころか、いざこれより咲匂ふ色香たつぶり花の盛りなるべしと、思ふはせなく代つて入来る第十五番は、二十歳ばかりの仔細らしき小作女にて、令娘ども

つかず女學生ともつかず、また商家の縁遠き生娘とも見へず、花柳の里に近き下地女とも見へず、銀行會社に羽振よき伯父の世話にあづかる風でもなく、奏任以上の官吏の許に細君の妹として養はるゝ妾でもなく、さりどて華族の筋目たゞしき侍女にもあらざるべく、紳士の思込たる妾にもあらざるべく、後盾のつく看護婦、大醫に可愛がらるゝ産婆、其他いろく心に砕いて思ひまはせど、見れば見るほど自体の分らぬ變物、當時流行の被布を着流して胸の邊に江戸紫の糾總を飾り、長襦袢の模様裾にも三枚重ねの勢は宜けれど、小袖の襟を首筋元に強く引絞めたるは平生の木綿着しのばれて呵しく、ダイヤモンドと見せたるは賈物挿入の指輪を左右に輝かし、細珍と名さへ付けば勿体なき女持の手カバンに中の賸物さをやと思はれ、おろく乾いた居端を軽く拭ふ西陣織の何とやら、

たゞ燈火に映して赤き浮織の照渡るを得意顔に、薄化粧の際し紅、たかゞと度を外れて高き鼻の象めいたるに引替え、兩の目の甚く落窪みし悲しさは、剃附けたる地藏眉けはしう際立ちて、下目づかひの突出頭、鬢の毛の人並すくれて張るを自慢に、宛がら貧乏公家の古女房が捻髪を乱せる如く、わざとらしき据腰、殊更の摺足、折角の白足袋に鼻緒の痕の色づきしは、下駄さへ見掛たはしの安物とぞ知られぬ、

第十五番

失禮ながら大定、風俗容色でも分りませうが、妾は、いくら財産があつても學識があつても、また俳優を欺くほどの美男でも、無位無爵の徒輩には決して嫁さぬ覺悟で御坐いますよ、公侯伯子男のうち、あまり出來ない事もないへませんから、まア中を取て伯爵ぐらいの御當主で、

お年が三十までの方で、四五年も洋行遊ばした當世風の
 開けた御前で、諸事家令舊臣なぞに舞はされない、凛と
 した御氣性のうちに、また得もいはいはれぬ情愛があつて、
 そして何にも御仕官なさらない方と、お馬車に乗つて、
 往來の平民どもを見下しながら、毎日どツかへ遊びにま
 いらたう御座いますワ、

人間の極樂を華族にあるものと心得て、勿体なや天下の盛衰
 に關する元動力の往來を、馬車の上より見下して平民どもと
 吐したき面相、さては半狂氣の色揚衣を引摺つて、いかさま
 に全身を飾りたてたる不思議の風体、そのれの事を自らと言
 はさりしは殊勝なれど、そもや何者が生出せし現世の化物な
 らむ、此女は此まゝにして親の顔が見たき心地せられぬ、そ
 れに引替へて入來る第十六番は、年ごろ十七八、ぱつと人目に

つくはどの容色ならぬと、さらに見飽きのせざる尋常の小娘
 荒き袖縞の綿入羽織を手組の細き絹紐もて結び、双子の一枚
 着ながら折目の落ちぬを身に纏ふて、唐縮緬の肌襦袢に垢染
 みたる痕もなう、これを他出の第二に數ふる紫羅子の晝夜襦、
 うつむき勝に思はず常の前垂を見て、あはたゞしう片端に引
 揚げたる風情、なんどやら心の内氣まのばれて優しく、おも
 ふに父は或官省に古く勤める小役人にて、母親の片手だすけ
 に朝夕の水仕業も嫌な顔せず、せめて下女の一人も連れうを
 生涯の希望に、傍目もふらで生れしまゝの我分に育ちし娘な
 るべし、

第十六番

妻は同胞が三人御座いまして、姉様は去年の春お嫁にま
 いらしましたし、あとは今年十四になる弟と妻ばかり

姉様の御婿様は、お父様と一處の御役所で、お年は恰好
 お父様の半分ですが月給は倍もいたゞく方なの、その上
 に御両親も何にも無くツて、下女を使つて居ますから、
 どのなにも氣樂でせう、姉様は幸福女ですワ、そして其お
 婿様がね、大變に親切な柔和の方で、おり／＼母様や妾
 にまで、いろんな物を、第一、弟なんざア貴方、家に居
 るより遙か潔好ですから、てんで歸らないンですもの、
 此間も知らないまに學校通ひの洋服を仕立ていたゞいて
 さ、ほんとうに御氣毒あの、姉様もまた姉様ですよ、お
 嫁に往つてまだ間があいから、ちつたア遠慮をするど宜
 いンですけと、妾ですか、オホ、ハ、ハ、妾なんざア、
 せうせ、妾はね、姉様に負けない御家へ
 往つて、弟、どころか、お父様や母様の着物でも仕てあげ

たう御座いますワ、
 わが住む屋根の上に青雪なきものと思ふて、一家の小天地に
 希望を満した所が、下女の一人を召使ふ姉に勝つた男とは、
 さても可愛氣に出來たる小娘の大望、願くば斯親この子の妻
 となるまで其まゝの無事息災にあれば、たゞ一筋に小胸を破
 に濡れて軒の廂の傾くこともあれば、たゞ一筋に小胸を破
 るのあまり、あはれ黄金ある浮世の悪魔に誘はれて、心にも
 なき汚辱の淵に沈むべしと、見るにつけ思ふにつけて何とや
 らむ餘所ならぬ心地しつゝ、不吉なれど行末いぢらしげに送
 りいだす眼前へ、入替つて現はれし第十七番は萬事初心を放
 れし二十一二の當世女、洒落か伊達か面倒臭きがためか、わ
 るく言へば我儘氣儘ぞれた結び、よく言へば人手をかるべ
 き島田蝶々束髪よりは我手で早き結び髪、顔色ぼつと曙の赤

みが、りて磨きあげたる艶々しさ、目鼻口元すべての道具は
ツきりと元氣よく、身のみはり衣裳の外見は華麗を厭ふて内
證に奢りの沙汰、まふく仕立て、飽まで人目を嫌へど、やッ
ぱり女ぢやもの見られたいが精一ばいで、時の流行に勝つは
どの勢なれば、紺セルの合羽めいたるものを左に抱えて、
兩袂の本天太緒、足袋も仕入で御座なく、失禮ながら足首を
出しての眺物、煙草めすには相違なきも、さりどて勤工場の
店賣でなしとは、これまた云ふに及ばぬ風体、どうやら待合
料理屋なんどの評判娘が誤つて書物を読みし身の果、いや余
が御身の眞盛昌なるべし、

第十七番

妻は妙な性分で、女に好かれる男よりやア、男に惚られ
る男が宜いの、何だか生意氣をいふやうですが、色の生

ッ白い氣の弱い骨のない、南風に遠ふた館のやうな、で
れッとした丹治郎さんよりは、ほんのこつたよ來て見や、
齒は立つめエといふ木塙の藤さんが潔好ですワ、當座の
風次第お心よしの柳男よりは、づつと地から生れた黒松
の大木男が好きですよ、たどひ芝居を見てもさ、両花道
の本立で編笠を脱だ鹽梅ぢやア、持てる名古屋より觸ら
れる不破の稻妻さんが好もしいですよ、曾我の十郎よ
り五郎の勇氣が好物、だから當世の髯にしてもです、ば
しや、の赤薄で床屋が剃る時、旦那もし此お髯は剃る
ンですか残すんですかど問はれるやうな、なさけない冬
枯のした髯は嫌です、それよりやア生黒の大髯で、顔に
髯があるといふより髯の中から顔が覗いて居るほどの思
ひ切つた髯男が好きです、相服かなンかで細い象牙頭の

ステッキで漆のやうな磨靴よかア、ぶくろゝした玉羅紗の外套に埋まつて揚面の外見なしぼう、薪雜木のやうなステッキで赤皮靴の大跨が氣に入りますワ、せんたい何でも殿様風は大の嫌、骨節の確然した一癖物で、さかない氣の男が堪りませんワ
 希望をいふから、職業まで男らしいのを、職業の男らしいンでは、あの羽振の宜い辯護士なンさア随分おもしろいでせうか、出身は學士とか博士とかの肩書で、決してお金なンぞに、びりつかない權利義務を俵骨に押通してね、一方からア何黨の何の某とかいはれる旗頭で、無論、衆議院にも籍が御座いますよ、そして貴方、どんな火水の中へ抛出して、も驚かない、かと思やアまた世間に笑はれる愛嬌があつて、もぐりの三百屋に民法から割出し

た金銭上の事を遣込められ、あゝさうか、おらア知らずなんだよ、などと眞面目で澄アして居てもさ、人が騒いで持囃すやうな辯護士を、ねエ貴方、嫌なこツてす、お金と衣裳を剣でしまやア九裸で凍え死ぬやうな吝な男は

なか／＼ゑらものだよ、あアに細君がど、いはるゝ女は斯る類あるべきか、その邊は良人に嫁して後のこと、行末まかど分らねど、まづ／＼たいの鐵であるまじき十七番のあとへ、第十八番の圖として入来るは十九か二十歳ばかり、鳥の濡羽色といふべき艶髪を、おどなしう品よき蝶々に結立て、はづかしげに差俯むく風情、まほらしき自然の振方、まかも衣裝萬端それに叶ひし高尚優美を欠かねば、御顔の道具とればどの美人かと思ひの外、あはれや左の一眼むさんに飛出で、

日に晒したる嬌の如し、

第十八番

ねニ貴方、こんな女に生れつきましたから——これさへ御承知で、三度の御飯いたゞけるなら、どんな處へでもまいります

唯これだけの言葉を出せしまゝ、右の一眼より涙はら／＼と滾せし哀れさ、聞くも氣の毒、見るは猶更ら辛き痛はしの面影に、おもはず鼻うちかんで幾度か首背さつゝ、御道理お心お察し申しますと見送りし背後へ、はや現はれて侍構へし第十九番は、満面痘痕の大女にて、年は二十一、身体髪膚の膏ぎつたる勢ひ、傳へさく昔の板額をまのばれて怖ろしく、身丈五尺四五寸、されど女なれば男の六尺にも勝りて見え、まかも横太りの臍量たしかに十八九貫目、グツしりとして宛

がら小山の動きいだせる如く、肩幅の廣さ胸邊の高さ、咽喉首には幾條の輪を入れて垂乳房の重げなる、用心せずば夏の炎暑に悪臭を發すべけれど、これを清く洗ふて生理學上より豪傑の種取とせば、なか／＼に得がたき希世の逸物ながら、いかにせむ元來の野卑に生れて咲いた花をも蹂躪る文盲無識、動くは舌と心の賤しき利慾のみなり、

第十九番

貴方さいて下さいよ、妾だつて出産から斯なでもなかつたんですが、運が悪くつて疱瘡神に可愛がられた結句、實に苦勞ですよ、まかし、いくら苦しめたつて今更ら叶ひませんから、なアに諦めて居まさら、どうせ満足な好た男を持ってないからにやア、まゝよ人の外妾にでもあつてやらうと思ひますワ、おや何故お笑ひなさるの、廣い

世界ですもの、外妻の相場も一から十までありますから、
 そんなに笑つたもんぢやア御座りましねエだ、眞實にさ
 || これでも、白髪七分の赤毛三分で黒いのが空にな
 つた玉蜀黍の化物爺なら、きつと二つ返事で承知しまさ
 アね、まかし其化物爺に金がなくッちやア此方から御免
 ですよ、なせッて貴方、お金の外妻になるンですもの、
 かわいさうに妾だッて、心ぢやアいろンな男撰びもしま
 すさ、けれを思つたばかりで何の功もないから、仕方な
 しに涙を呑で玉蜀黍に身をまかす氣にもなるンですよ、
 誰が杖ついて出る花婿なんぞを嬉しがるもンですか、こ
 れも浮世と思やアこそ || その代りに貴方、お覺悟な
 さいよ、隠居様を心から大事にかける外妻たア外妻の出
 來鹽梅が違つて居ますから、さんざッばら不貞腐れを働

いて、またそれ相應の色男も稼がうし、ちよいと暗闇の
 轉寐ななかで、どんな掘出物に當らうも知れませんし、
 それが段々面白くなつて、事に寄りやア玉蜀黍の根へ熱
 湯をぶツかけても遣りますさ、なアに早く枯れッちまや
 ア、幾何かの形見分も出るでせう、第一が、死ぬまで女
 にこびりつく爺ですもの、いやに深あさけの情愛があつ
 て、悴は別に身代を譲つたから此家を此ま、手前に呉れ
 るなんかど、どんた僥倖になるかも知れませんよ、よし
 うンなにならなくッてもさ、爺の色狂氣は別なもンで、
 つまり若ひ人よりやア勘定にありますから、なアに表面
 は食はしてくれて月に三四圓の小遣もありやア、結好で
 す、あどは流々細工の品玉、種は此方にありますから
 これほ岩疊の身を碎いて眞面目に奉公せば、二人前の給金

妻は新聞記者が希望で御座います、いや貴族だの豪商だの美術家だの工業家だの、また軍人だの醫者だの官吏だの、なるは人間名譽の範圍内には随分いろんな職業の、もありませんが、一身の小にして輕い割合に責任効能の大にして重いは、およそ新聞記者だらうと思ひますよ、第一貴方、一本の筆よく時論を起し時論を收め、三寸の舌よく天下の導火線となつて、ひそくまれば國家の利害得失にも關しますもの、ですから大臣だつて金持だつて何でも斯でも世上一切いは、手のうちの生殺自在、實に愉快で高尚で、そして束縛はあし遠慮はなし、これはい立派な男らしい職業は外にあるまいと思ひます、ね、二貴方、ですから妻は、一黨一派の機關紙でない獨立公平の新聞記者で、かの無冠の王どもいふべき見識を備え

も取つて衆にも賞められ、果は手固い番頭の戀女房にもなるべきを、慾に目のない悪女の大白痴、死際ちかき好色の隠居みつけて一時に物せむとの企謀、あるは斯る女も世には多けれど、今時に外妻おくほどの粹隠居が、孫のやうな赤襟にこそ皺を伸せ、なんとして十八九貫目の痘痕女に腰の弓勢ひツたて、老の矢を放つべきや、ねもへば行末に破布子まどふて三界の首枷を背負ひながら、十町四面の米屋の立札みてあるく女なるべし、これに引つゝいて入來りし第二十番は、ひよろりと背のみ高くて色青さめし瘦女、憶病者の目には海關の幽霊と見ゆれど、元來肺病でもなき元氣とこやらに合んで、潤澤のなき唇端に一理屈ひたげの勢ひ、年は二十歳前後、二年はと前に女學生の姿が嫌にありし女ならむか、

第二十番

て、國民からは意志の代表者と仰がれ、政府からは民間の羅針盤と見られるほどの學才名望ある人を、ねえ
 〓はんどに思つても氣味の宜い勇ましい境遇ですよ、手に持て紙に落しかけた筆は王侯相將も止めさすことは出来ず、また已めた筆は萬金を積んでも再び動かさないで、た
 い自分の一心が感動するまゝに、ねえ貴方、これが人生の精華で御座いませう
 〓いづれ今日の世上に新聞記者を良人に祈る女は、皆かゝる高尚雄大の心あるに相違なきも、さて口でいふほどの新聞記者が河原の小石同然、ころくど其處四邊に轉がり居るや否や、名の正しうて實の曲れるもの、影の大きうて本尊想ひの外に小なるもの、さては屈の如く聲のみあつて姿なきものさへ多き世の中なれば、御用心く折角の大願成就が、徒らに白痴

おとし弱虫いぢめの筆助が妻とならずんば幸なり、上等の紙屑拾ひ生きた活字の女房とならずんば幸なり、また捏造種原稿ふりまはして怪訝の役徳にあづかる強持先生の細君とならずんば幸なり、乃至ばんど己が額を叩いて反身の説法に通を氣取る猪鼻助の噂とならずんば幸なり、來すもがなの招待状うけて宴會の席上づうしく罷りいで、あれが記者先生の令夫人と敬せられずんば幸なり、乞ふ自愛し玉へと送りいだせし庭前に五人の女づらりと立並びぬ、おどろいて仔細を問へば、いかに冬の夜長といへど餘りの大勢にて、應て鶏が啼く曉にも近ければ、これより大略を申上げて御免を蒙りたしといふ、なるほど時に取ての御遠慮、さらばと聞けば

第二十一番

妻は、國の爲だの無上の名譽だの國民の義務だの干城だ

のと、さやうな、むつかしい事は存じませんが、たゞ軍
 人を男の中の珠玉と思つて、いッそ慕はしう御座います
 ヲ、生きて居るうちの勇ましさを立派な健氣さ、死では猶
 更ら、不吉の屍の上にも貴方、末世末代までの花が咲き
 ますもの、うして第一、平生の氣性といひ品行といひ、
 さッばりとした水の流れるやうで、女に生れたから
 は、どうせ良人を持つからは、軍人の妻に、わけて貴方、
 大海原は我墓場とか唄ひます海軍の人の、ねエ

第二十二番

妻はお醫者様、醫は神につぐ至仁至愛の職ですもの、お
 よそ世の中に、生涯の間このお醫者様の恩をうけないも
 のが御座いませうか、鐵や石で作つた鬼のやうな人でも、
 生れた時と死ぬ時の二度は、ねエ貴方、また天下を

引返して片手の掌上に握るほどの英雄でも、朝風一
 で直々駭る疾病といふ怖ろしいものをオホ、指先の
 加減ちよいと治すのは難でせう、御醫者様です、だか
 ら妻は

第二十三番

妻は、私立學校を立て、居らッしやる方に、それも
 高等教育や専門の學校よりは、完全な初歩の普通學で、
 尤も組織の宜ひ規則の正しい萬事の整備した私立學校の
 校主を、國家といふもの、一部が此内から産れて出
 るのと、そんな大層な思慮は無クツても、せめて世に名
 をあげ社會の爲になるべき人が、十人のうち一人ぐらい
 必ず出るだらうと言はれ、また實際に出すほどの立派な
 眞正の教育家を、高等教育や専門學は四季の衣服同

妾は、無形の學理や空想の詩人めいたのよりは、手足の
 動くところ實際の物跡に現はれて、その術と共に千百年
 の後までも社會の利益を残すやうな、立派な大技術師を
 歴上工學博士の肩書がついて、そして技術は猶更ら天下
 に並びないほどの人を筆や舌は時候の挨拶さへる
 器用で居ながら、鐵と石と木と土を持ってば、それこそ海
 と山を取替へて、雲の中にも掛橋を作るやうな大技術ある
 人を——生意氣を申すやうですが、妾は、千百の詩歌
 を一日に吟詠する人よりは、半日かゝって煙草盆の一個
 も細工するやうな人を——とかく思想界の顔色の青さ
 めた身体の細い幽靈のやうな人は、いくら高尚な事を言
 つたり優美な事を書たりしても嫌ですワ、あんだか人間

然で、初歩の普通學は身体だといひますもの——

第二十四番

實業上の力と經濟上の學とを兼ねて、そして別に天生の
 風韻を帯びて居ますから、自分は常に自分の仕事だけで、
 申さば半日の暇を閑靜に暮さうと思つても、世間から騒
 がれて氣毒なほど名譽の重荷を持たされ、まきりに困る
 困ると通廻つて居るやうな人を——さうですね、年頃
 は妾の倍でも構ひませんの、男は前額の元かゝつた五十
 を盛壯といひますから、第一、それ位の年輩でなげやア、
 せうせ、それは世の人になからうと思ひますよ、なに貴
 方、なま若い人は萬事に頼りあぐつて心細う御座います
 もの——

第二十五番

さうですね、職工の數千人も使つて、其外またこれがた
めに衣食して居る者は、直接間接どれくらいあるも知れ
ないやうな、大工業家の妻になりたう思ひますの、まか
し株式組織や合資会社は嫌です、すべて一個獨立の所有
で工業界の王ともいはれるほどお人を——さうあれば
妻だつて遊んで居ませんよ、良人に負けない氣で、その
數千人もある職工の妻や娘を集めて、また別に何か女子
の大職工場を立てますワ、そこで妻も一個の女王様——
——どんなに愉快でせう、

第二十九番

妻は、在野の政事家で、その一言一行が時の内閣に響く
やうな名士を——いくら良人が家外で腦を痛めて來て
も、妻は家内で珠玉のやうな愛情と華のやうな快樂をわ

てがつて、すく一夜のうちに療治して仕舞ますから、ま
た翌日は元の勇氣で出掛けませう、ね貴方——もし政
敵の四面重圍に陥つて腦が破裂しさうな時は、なに妻も
一處に討死の覺悟ですよ、討死たつて別に死ぬことも出
來ませんから、まア何ですね、夫婦が手に手を取つて、
どッか遠い田舎の温泉へでも落武者とありますのさ、其
處で充分に銳氣を養つた上、機に乗じ變に應じて再び良
人と共に出るなンさア、これはど愉快なものでせう、だ
から妻は政事家に、まかし壯士あがりの亂暴者や、演説
かせぎの日傭取や、御多分づきの頭數になる政黨屋は嫌
です、眞平御免を願つて、いッそ委任官ぐらいな、役人
の奥様で大臣の内支關から良人の機能を演べにまいりま
すワ、

第三十番

妻は妙な性分で、騒がしい都會は嫌、その中央で忙がしい事業などは猶更の嫌、ごとくと車馬の音が響いたり、煙のやうな塵埃が舞込たり、製造器械の汽笛が絶えず鳴つたりする中で、土蔵づくりや煉瓦の建詰つた四角な窓の下に暮す人は、よくまア生きて居られるこつたと思ひますよ、だから妻は年中駒込の別荘ばかりに住で、月に一度しか日本橋の本宅へは歸りませんの、まかし駒込も、まだ妻には騒がしいから、いッそ、ヒッかの山奥へでも道入りたい氣がしますよ、
 妻は同胞の中でも別物にされて、みんなが女の仙人だぞと悪口を言ひますの、ですから妻の性分として、もし良人を持つあら、まづウカナ片田舎で浮世を放れた豪農か、さもなげやア、山林

第三十一番

の影に水の流れて居るやうか閑静な土地で牧畜の業でもする人か、また照渡つた月夜に雁の聲をきながら植物園を見廻りに出て、歸宅のおみやげには妻に詩歌の一首も見せてくれるやうか人を
 妻は日本一の書物屋で、文學上に關した出版ばかりをする家へ、文學者といふものは高尚優美なもので、世の中から尊敬せられる割には、實際あまり世の人に厚遇せられぬといふ事を、聞ても居りますし、また見ても居りますから、文學者は昔より貧乏と極つて、この貧乏に屈しない強情な我慢な人を、まア其中の文豪とか氣骨たのど、申しますもの、ねエ貴方、人の出來ない貧乏してさへ立派な男ですもの、もし人に過ぎた自由を興へて

情は無論、いはなくッてもですが、まづ希望を十二分の割合に立て、男振の美の二分で、財産が三分で、一分の風流氣があつて、名譽と學識をわけて三分半、あとの一分半が幸運で、都合十一分を引去つた残り一分が、あまり物に頓着しない大揚な人品を、ねエ貴方、職業は何でも宜いの、いづれ以上の注文に叶つた位の人あら、まさか見苦しい境遇でも御座いますまいから、おや忘れたこと肝要の年齢を、お爺様ぢやア嫌ですワ、年は妾の五歳まで上の人

第三十三番

いくら身分が宜くッても、いくら學識才能があつても、いくら財産が多くッても、またこれほどの美男でも、身持の悪い人は嫌、品行さへ方正で、そして義理人情に厚

い人なら、えかし夫婦の衣食住に事を欠くやうでは困りますから、 さうか妻子とも十人の人を相應に養つてゆく位か力を 其外に何にも希望は御座いませんの、 よし望んだッて思ふ通りにありませんから、 それは妾の運次第に致しますワ

十三人いづれも當世生育の令嬢達にて、年頃は十七八より二十一二までの間、さして際立つほどの美人もあけれど、 また見苦しきはどの醜女もなく、 身のまはり衣裳萬端の嗜好も様々ながら、 まづおしあべて夜の襖も木綿の夢は知り玉はず、 三度の飯も御給仕なくては召上らぬ境涯ならび、 されば目も心も自づから大空の霞ばかりを見て、 下界の脚下に浮世の秋を御存じなきまゝの春にうかれ、 おもひくゝに劣らぬ希望は 天晴れ健氣なれども、 元來が縁といふもの侍婢のやうに自由

ならねば、手前の注文どいて先方の品物うごかぬ御腹立も
 明らかかど、影ながら御心配申上げて送り出せば、引違えて
 入来る三十四番の女、年頃は十八九、島田鬘がツくりと根は
 落ちて緩めども、忙しき當座しのぎの掻撫に妙を得たるや、
 さほどに亂れたりとも見へぬ髪持たしやう、おめし縮緬の
 綿入羽織に荒き棒縞の南部小袖しどけなく着流して、裾はら
 く、と下模様の赤さを厭はず、この冬の夜寒に素足の伊達は
 黒本天の太鼻緒に冴て雪の如く、すべての肉置ぶつてりと肥
 て、眉の濃さと目の晴れたるに一段の愛嬌を含み、生際の富
 士額と口元のカミしに重ね、くの色を添え、なんの形見や鼻
 の左に粟粒ほどの疵痕まで、結句もの、風情を作つて男の目
 をひく基となり、おのづから襟に染む白粉の香と唇紅の痕を
 見れば、やさしき品はなけれど色たつぶりの情らしきを専一

に、どこやら蓮葉一ぱい物に怖れぬ氣を帯びたる風情をもそ
 も何女ならむ、身に比べて咽喉の細からぬと年に似合ぬ聲の
 太きは、これぞ當時流行の女義太夫と見しは癖目か、まかも
 身の扱ひ言葉の端の俵ある勢ひ、ばらがきと世にいはるゝ摺
 切女の類なるべし

第三十四番

おや、晴がましい事ね、此席で何ですか、自分の思ッ
 てる男を、さまりが悪いよ、まかし出たが最後の切腹場、
 ゑ、構はない、ありつたけ言ッてしましますから、冷か
 しちやア嫌です、御存じでせうが、わたしやア高
 座もんで、さうですね、十四の春から晒しぬいて居ます
 から、男あんまり珍らしくも何とも思ひませんが、さて
 女ですよ、これでも自分が、おつう妙に思ッた人の前ぢ

ッて貴方の名も、いや／＼いッそ此方へおかしなさい、
 せこで何うして打捨るか知れたもンぢやアあい、この浮
 氣男や、なぞと言つて其裏口を邪慳に引揚げて中を改め
 ますの、そして三圓しかない時は心配さうに眉毛を寄せ
 て、貴方これだけですか、これンばかりかして何ですネニ餘
 計な事を、妾の二圓を入れて都合五圓にしておきますか
 ら、辛抱なさい、ひだ費しちやア不可ませんよ、はンと
 に世話の焼ける人だ、と其まゝ戻して暫時は放し飼の体
 で、七八日も立つと直ぐに十四五圓になつて來ますのよ
 オホ、、、、これでも資本が入りますワ、もしまた斯
 な奴さんが一時に立込だ時にやア、却て仕事が増えますよ、
 おもひさし稍當をさして、さんざッばら氣を揉ませた上
 で、まんべんなく御用仰付けますから、まるで町内

の御祭禮に軒別の烏目を集めると同じ事ですア
 として書生の中でも國本の宜い學資の澤山お坊様には、
 萬事してツと早く、始めツから一切べた／＼の色仕掛、
 大おとし小おとし家業の源で、おはれッばく持掛けて取
 るだけの身の皮を剥だ上、逆様に振つても鼻血の出ない
 ところを、二三个月の下宿料を立替ますの、すると貴方
 もう本藝の幕明ですよ、妾も東京に居られないとか何と
 か遣れッこのない義理と情の柵にかけて、席亭の十日も
 休む覺悟で其坊様の故郷へ人目老のふの落人筋、並松白
 壁づくりの伯父様や伯母様が寄つて、おのれはなアの強
 意見で摺た揉だの真中へ妾が飛込で、死ぬ／＼の二三邊
 も言やア忽然十圓ぐらいの日當にありまますよ、そこで御
 用は先づ結局、此男まだ物になると思つても、追々あと

連が問えて居ますから、さう一人にばかり掛つても居られませぬのオホ、高座よりやア、まアこの方が本職のやうです。四五年の内には随分お金も出来るだらうと、お思ひでせうが、さうして、また其お金を横合から吸取る奴があるから堪りませぬ。畜生、まかしこの畜生が妾等の生命の洗濯で、斯快がなくツちやア貴方、誰が苦勞して貧乏しますものか馬鹿、しい、その男ですか、そりやア各々いろんな希望があつて一概に言はれませぬが、まア妾あんな味帯びた勇肌の人で、さうですね、ちよいと簡単に言やア三十四個處の刀鉞、これも誰ゆえとか何とか、氣が遠くなるほど意氣な中音で爪弾のまのび駒、そして御本尊が與三郎もどきの人です。よ

女義太夫といふもの、萬事ぱつとりとして仔細らしく情らしく、艶物としてからが義理と戀との切なき涙一色、大物となつては鐵槌で石を叩くやうある事のみ語つて、おのづから其身も人情に深かるべき筈なれど、真相は浮氣みちたる大ばらさがさにて、地獄の上の一足飛、なか、度胸の据りし曲物多しとかや、されば斯る女も珍らしからじと今更に呆る、折しも、第三十五番に現はれしは年頃二十二三、瘦形の色白はッそりど世にいふ小女房の組立、銀杏返しに揃はねども薄桃の珊瑚を根掛にして、古渡唐綾を真似たる赤地の絹双子に襟附の額裏、荒き立縞の結城銘選これも半纏仕立の身格相應うつりよく、肌着の襦袢と前垂とは第一の華奢、下駄と足袋どが第二の華奢、萬事あたに過ぎて品を欠けども目色いさゝきとして物に客つかぬ決断の風情は、父祖三代生抜の江戸ッ

子にて内証よき町内の頭の娘、あゝでもない斯うでも嫌に此
年までの獨身と見へたり、

第三十五番

御免下さいまし、妾は貴方、妙な性質で、何より斯より
相撲取がホ、ホ、今時の女で相撲なんかを彼是いふと、
まるで狂氣同様に扱はれますが、持つたが病で、どうし
ても思ひきれませんの、なまヒツか上品ばった木像
よりやア、男らしくって嫌味がなくって、これほど立派
なものはないと思ひますよ、あるは、春書草紙の殿様
みたやうな男を美とか言つて騒ぐ目にやア、化物にも見
へませうさ、容貌ばかり無様に大きくって何の役にも立
たず、物事ぞんざいで首尾がなくって、色は黒し額には馬
鹿に平ッたし、耳が潰れて鼻が満足でなし、おまけに大

飯大酒の大胡坐、牛のやうな聲で無闇に高笑ひしあがら
時候の挨拶一事ろくには出来ず、年が年中ふらくして
着物といやア四尺何寸で袖は繼足、それにまた病氣にで
もならうもンなら其時こそ大變、山門の仁王様を横に打
仆したやうで、萬事に手数のかゝつた經濟の悪ひ厄介な
荷物で、どこに何うといふ戀着のないやうですが、さて
貴方、まア着物を脱がして御覽なさい、親から譲りのま
ンまで少しも飾りつけあしの裸体百貫、地から生拔た岩
組の骨節で、雲をつく肩胛張つて日本晴の土俵へ上る時
の美事さ、いくら何と言つても外にやアありませんよ、
力足ふんで左右の踵を砂に埋め、青天井を額越に中腰を
極めながら、鬼でも掴みころす猛勢で、まいつと金
剛息を吹く毎に、權おとしの大髻が浪のやうに揺つて、

ほんどうに男の中の男ですよ勇健の中の華ですよ
 だから妾は人に何といはれても構ひませんワ、幕内三四
 枚ぐらいの手取力取で、人氣の宜い、愛嬌のある、なる
 ッたけ圖抜けて大きい見上げるやうなのをホ、ホ、
 花柳の巷に育ちし三十前後の女ならば知らぬこと、當世の娘
 氣質として珍らしき好事に似たれども、春の霞に打出たす
 梅太鼓の遠音は今もなほ響き渡りて、江戸長崎や國々の文句
 も其まゝ懐かしう、かゝる境遇の女には歌舞の菩薩の音楽よ
 りも嬉しかるべし、つゞいて第三十六番に現はれしは、これ
 も二十歳の上を一つ二つの年頃にて、卯の毛の隙間もなき日
 本古流の上品粧飾、琴の組も茶の湯の席も生花も、さては和
 歌の道、調理の献立、裁縫の手業、十種香の銘にも驚かぬ風
 情を備えて、よろず馴れたる諸禮が、りの措足、つまはづれ

の奥ゆかしさ、坐の取りやう身の振方、すべての女一色わざ
 とならぬ法に叶ひて、容色は十人並ながら瓜實の中高いやし
 からず、わけて目鼻の運轉を輕々しう持たねば、おのづから
 の品を作りて薰物の馨る心地しぬ、されど萬一その點を打た
 ば、此上に一寸ばかり背を高くして、首筋元を二分ばかり伸
 したく、生際あまりに黒く彩ると、さうやら眉尻の跳過ぎた
 ると、物いふ聲の人柄に比べて細からぬのみ、身分を何ぞ
 ど問へど、なか／＼に打明けまじき謹慎の氣配、おもふに江
 戸徳川家の大奥に勤めし醫者か坊主の今なほ有徳に暮して、
 雅俗の間に此娘一人を珠玉と育てしものならむか、

第三十六番

妾は親共が舊弊で御座いまして、當節柄の事は少しも存
 じませんから、逆も洋服を召して口髯のある方なソぞに、

せうして宜しいやら、せうして御機嫌を取るものやら、
 さッぱり御様子分りませんし、また先様でも御不都合
 で入らッまやいませうから、さやうで御坐います、
 もし身分相應に叶ひますなら、骨董屋なんぞへ参りた
 う心掛けて居ります、まかしその骨董屋も、店前に道具
 を並べて往來の人を相手に致すやうな、俗に申す晒物屋
 へはホ、ホ、ホ、ちと参りたう御座いませんの、願ふ事な
 ら、洗ひぬいた表一面の格子戸で、お道入になれば寂び
 た中庭に明竹の葉越かなんかの春日燈籠が見えて、住居
 は別に土廂の深い坐敷が、り、お客様は兎も角も席へ御
 案内申して、不束も手前でも差上げた後、手を鳴らして
 御注文の品を取寄せ、また御時分なれば會席の御相手も
 致しながら、まづウかに商賣をするやうな骨董屋

それで御坐いますから、名は骨董屋でも眞價は鑑定家同
 様で、世間にも重く用ひられ、同業にも尊ばれ、また高
 貴の方々にも御膝を並べて、これは斯うと附けた一言が、
 その當時の折紙にもなりますくらいな人を、
 また扱ひます品は、たゞひ盗まれても構はないほどの潔
 好な物ばかりをホ、ホ、盗まれて構はないものは御坐
 いませんが、お金や着物物のやうに類の多くない銘物です
 から、盗んだッて貴方すぐ知れますもの、どうせ買人も
 買手も相應いたしませんから、
 これはまた當世ちよいと飛放れたる希望にて、なみくの娘
 氣には心もつかぬどころを、流石は静かに思慮の深きはあ
 りて、その身の嗜好より生出したる風流五分に商買三分、あ
 どの二分を浮世の安樂に渡らむとする面白さ、まづ今の世の

強物、髪物といは、いふべし、さてその次の第三十七番は、年頃十八九の令嬢、風、揚卷の束髪みごとくに襟首の三本脚あきらかに、兩鬢の生下りは色の白きに一際立ち、頬の薄絹、耳朶の櫻色、目千兩の切目に無量の愛嬌を湛えて、丹花の唇に力味を帯びつゝ、額すつと自然に強岨からぬ横顔は正しく美人の本質、眞向の御顔いかに絶世の尤物ならむと思ひの外、あはれや南無三寶、親指さへ自由に出入すべき鼻の穴はッど會釋もあく押開いて、まかも上向の煙出、さながら名玉に龜裂の入つたる心地して、氣毒ども笑止ども差對ふて挨拶のせむやうもなし、

第三十七番

妾は商業家を、まかし物品を直接に扱つて自分が手を下さすやうな、小さい狭いのは嫌です、あちら事なら三府五

港その他の要所へ立派な支店を構えて、本店は無敵東京で、日夜四方から来る郵便や電報をテーブルの上で切盛するやうな、富と機敏とを兼ねた快活な商業家を、
——ですから東京の本店に居ることは稀で、年中いつも汽車や汽船で飛歩いて、夏と冬だけは温泉か別荘へ引籠りますのよ、そこで妾も決して家にばかり居りませぬワ、どこへ行くにも良人にくつついて、衣類や手道具までも一切すべて旅といふものを目的に拵えた品で、生涯の半分は他國の上等旅館で暮すやうな、おもしろい身分になりたう御坐いますよ、いくら名譽があつても地位が高くて、朝夕おなじ召使ひの顔ばかり見て奥深い一室へ押籠められるのは大嫌ひ、せればと丁寧にしられても、猫の額のやうな築山や泉水を詠めて暮すのは大嫌ひ、

是が非でも十日に一度はステーションを見せてくれる良
 人でなければア嫌ですワ、一年も箏箏の前に据られて居や
 うもンなら、それこそ病氣が出ますよ
 月に三度の御勝手遊樂、年に四度の演劇、おりく月の雪花
 にては迎も御承知のなき奥様風、生涯の半を旅に暮すべき當
 世快活の商人とは天晴れ健氣なれど、良人の不在を預りて内
 外の家事一切を整えむとはせず、もろどもに馳廻つて東西南
 北いたる處の旅館に世を送らむとは、ちど鼻先の御人体あら
 はれて輕々しう、事によれば一年連添ふ良人の顔も古臭しど
 て、心ひそかに見飽き玉ふ身の末あらむかど覺束なし、つゞ
 いて入來りし第三十八番は、面の道具いづれも無事に揃へど
 も、色は淺黒くて目のうち何とやら凄味を帯び、すべての容
 体のッそりとして騒がぬ額越に人を見るのみか、ひきしめた

る固き唇端にも冷かに物を笑ふが如く、高き背を我から屈め
 て身を潜めながら、おりく首を伸して反るが如く仰ぐが如
 く、瘦せたれど骨太の組立、笑渦はあれども乾きたる底に露
 なくて、髪髪の毛の縮みたるを苦にもせず、首筋に遅毛の多
 も其まゝ、萬事うるさしといへる顔面に陰氣みちくたれば、
 手足の指の爪まで赤味を失ふて、人並すぐれし衣裳も可憐ら
 月なき夜半の雁金とぞなりぬ、されど流石に身分の卑しから
 ぬにや、起居振舞おのづから絹布に馴れて角も立たず、才氣
 あふれて學びの道にも淺からぬにや、首葉さへ當世めいて加
 之も男まさりに演立てぬ、年齢の頃は二十四五、

第三十八番

縁といふものは殆ど神の手函に秘せられて、その函の蓋
 が開くまでは一切すべて無益の沙汰、いくら焦心つても

て多勢の頭数につく人よりは、假令いふところ行はれずとも、獨立獨行、あくまで四面八方に當つて少しも屈しない人の意味で、時によれば其事業に然ほどの障害なくとも、活氣を添て進歩を促すがため、わざと一場の衝突を持上げ物議を惹起すほどの仇役を望みます、ひらったく申せば、軍人として日夜しきりに炮煙彈雨を待つ人、醫者としては難治の奇病に當りたい人、商人としては經濟紛乱の真中で腕を試したい人、政事家としては快刀亂麻の伎倆を施したい人、すべて事々物々その一身を賭して少しの未練氣もなく思ひきつて目覺しい活動をする人なら、たとひ奸物といはれても何と誹られても、敵の重圍の中で此良人を天とし、生涯の苦樂は愚か、時に取ては、どんな事でも致します、

一代の俗流を破つて奇氣奔放せる豪傑かと思へば、また陰險の器を抱えて世にいふ策士に似たる節あり、あくまで正義を取て動かさること山の如き大物かと思へば、また事を好んで物を攪亂せむとする小人に似たる節ありて、言ふどころ道に當らず理に合はず、いつしか類に類せる名聞功利の怪物を描きつゝ、これを天晴れ世にあるまじき所天とせる心には、さららに一點の尊ぶべき真理なくて、たゞ一筋に目覺しき活動を望み、たゞ一場の快に生命を賭する勇氣のみを願ひ、果は乱れて物の無事を厭える不所存は、おもふに歴史の上より鼻先の智慧を絞つて撰び損ねしものなるべし、つゝいて入來りし第三十九番は、見るからに清けなる十五六の小娘、冴渡る雪の富士額に黒々と取揚げし前髪あふるゝばかりに盛立て、眉は心ばかりの八の字となりたるも一入おかしう懐かし、

いきくと張詰めし目元に我は知らねど飽まで男殺しの本性を備えて、古今の名畫も此物一個にて満面の美を作る鼻筋の尋常さ、寒紅を含まねど色いつまでも褪めぬ唇端の愛らしさ、薄絹もて張りたらしむが如き頬の肉には曙の櫻をうつして、凜々しう引えめたる顔の要所に卵の毛の弛緩もなう、年に合して瘦せもせず肥もせぬ中肉中背、その羽二重肌より漏出づる手足の爪端まで、うまれつきの愛嬌を湛えて殊玉を展べたるかど怪しまれ、おのづから左右に流れおつる地藏肩、すつと自然に押据えたる柳の腰附、燈火の影に坐しながら白き前齒一二枚に總身の色を宿らせて、にこもど笑ふたる風情いよく曲物、あはれ此まゝ、浮世の華の二十歳前後となれば、此女はれは色の罪を作るかと行末おもはれて心憎し、されど衣裳は身に比べて下々の下、たい垢つかぬ双子縞を纏ふたるこそ、

結句ながれて落行く末の怖ろしけれ、

第三十九番

妾なんかは家がいきませんし、仕度も何にも出来ませんし、ちよいと出るにも斯な衣裳ですもの、口惜くつて、口惜くつて、だから一生御嫁に往きませんワ
 嫌なこど、お嫁に行くど笑はれに往くやうなものですから、それよりやア、さんざ今のうちに精を出して、もう二三年もすると藝妓になりますワ、ほんどに藝妓はど宜いものはないのよ、父様や母様も承知の上だし、また彼誰が然様いつて頻りに勤めますから
 藝妓にさへなりやア自分の好た粧飾も出来るし、おもった事は自由になるし、毎日お客様と遊び歩いて、年中いろんな人の中へも出ますから、運次第で、はたらき次第で、せんな立派あ

處へ嫁かれるか知れませんが、酒の酔に及ぶ物、青二才に大金、貧乏人の家に過ぎたる娘、いづれも危きものにて未の未まで無事なるは稀なり、されば今こゝに此娘も美人に生れたる不幸、十一二のころより額際に賣物の銘をうたれて、いつしか我身も貧を歎き餘所を妬むのあまり、浮世の華を慕ふて賣物にある月日を待兼ねつゝ、果は我から魔界に飛入りて生涯の罪を作れども、さらに其罪を知らで夢の榮華に露の色情を争ふもの、およそ人間これほど哀れに淺ましき境涯はなかるべしと、おもひつゝ見送れば脚下かるげに出行く姿も、いちらしや何者にか襟髪つかまれて宙に提げられゆくが如し、
 おりしも東天やうく白みかゝりて、西の雲には宵の星影ちらはらと残りながら、はや空を渡る旅鴉二啼三啼、さてはと

心急いで聲をあげつゝ、四十番の最後にあたれる女いかにと呼べば、百歳の半婆になは二十歳ばかりを重ねたる七十の歳くちや、五十年の昔は驚啼かせた事もあらむが、今は兩眼おぼろにかすみて手足も枯木となり、白髪染せむにも頭は焼野の尾花、耳は遠寺の鐘の音、口は蛇の棲むべき洞の穴、梓の腰弓のしきりく伸せども、寄る年浪の敵に責められて防箭一發も叶はねば、杖を力に脚下とぼくど歩みながら、おもはず庭の飛石に躓いて、やれどつこいしよ、南無阿彌陀佛と念ずる掛聲、なかゝ老ても隅には置けぬ洒落婆々なり、お婆さん危いよといへば、はい有難う御坐います、かう見えても親の組立、まだ確固もので、ハ、ハ、ハ、と齒もなき口をあけて笑ふたる顔は、曉の霜に映じて一入さらに物凄し

第四十番

渡りお婆さん孫女のためには大氣焔を吐て立去りしころは、夜も明
 けて、日本國中どこへ出しても退歩を取らない立派な男
 上活動があつて思慮が屈いて、如才がなく、謹慎が深
 け、まるで歸してくれないやうな親切の媚で、その
 だらうと魚類は鰻かなぞで、今日も居る明日も泊つて
 て貴方ね、夫婦で手がぎにしておへ通して、齒が悪い
 妻が往かうもンなら、それこそ大騒ぎ、お婆様が来たッ
 せん何にも入りません、夫婦たゞ氣樂な差對で、たまに
 世話をしてくれる伯母様が三人ぐらい、其外は入りま
 ない伯父様一人と、まさかの時には直ぐ駈付け
 類はあつても宜う御座いますから、なるべく金を持って口
 敷のきかない伯父様一人と、まさかの時には直ぐ駈付け
 せんと、夫夫婦が三人ぐらい、其外は入りま
 ない伯父様一人と、まさかの時には直ぐ駈付け
 類はあつても宜う御座いますから、なるべく金を持って口

はい、御免下しやいまし、妻しはね孫女が病氣で寐て居
 りますから、その代理に上りましたもので、いやもう、
 いろん事、年寄に苦勞を掛けますよ、孫女は
 貴方、ことし十七になりましてね、妻の口から申しては
 何だか阿しう御座います、すいぶん餘所の娘様に負け
 ない容色で、それは貴方、うるさいはど諸方から買ひに
 来ますが、妻が斯うして目の黒いうちは、めつたな處へ
 遣りませんの、身代が宜くて男振がよくて、伶俐で遠
 者で真面目で親切で大揚で、ね、貴方、浮氣な人を持た
 しては生涯かわいさうで御座いますから、身持の堅いの
 が第一で、第二は客な男を御免察りますよ、はい、けち
 くした人は義理人情を欠て世間の交際が出来ませんか
 ら、そして親もない同胞もない獨身で、さやうさね、親

法泉寺の念佛に伴ふ木魚の響、曉の冬を傳えていと、身に染
 ひ折しも、愛犬智備の一聲わんと吠えしは、はや霜おく堤上
 に人影の通ふなるべく、眠獅菴の燈火も今は光輝を失ふて赤
 く障子にうつりぬ、

四十人の女さまとく心いるく、見るに従ふて人品を思ひ聴
 くに従ふて行末を想へば、またこれ一夜に得たる悟道の端く
 れ、あらくさつと拾ひあつめて浪六文庫の第二篇に備ふ、

浪六文庫の内 志なさとため完

浪六文庫の内 志なさとため完

明治廿九年十二月廿七日印刷
 同三十年一月一日發行

定價金三拾錢

版權所有

著者 村上信
 發行者 青木恒三郎
 發賣所 青木嵩山堂
 同發賣所 青木嵩山堂
 印刷者 平島曠
 印刷所 八重洲橋活版所
 同賣捌所 嵩山堂支店
 同賣捌所 山田直三郎

浪六子著作小説

<p>大坂城二冊 正價金廿五圓 古今の二人豊太閤の美事あけたる日本二の名城に、すさし豊長元利の昔たじのんで血に立く魂の老武者の、一時の力に成らず運卒の骨まじ枯れし運卒の魂を無情の草木に注ぐ處の隆盛衰の物語の繁し上りて如何なる文章を著せしや</p>	<p>當世五人男 正價金廿五圓 當世の世を遍し五人の養生が、一時の物語に老練行入儀にして、幾く年月の風雲を叱咤せし、その勢ひ果して如何なる個中の消息ありや、固より時花月の小文字にかきこらるり</p>
<p>鬼あざみ一冊 正價金廿五圓 浪六氏いふ、これまで著作せし二十八冊の小説より此の鬼あざみ一冊が却て骨の折れた地するを、以て本書の如何なる書し玉</p>	<p>十文字前編二冊 正價金五拾圓 今日の讀者の眼裏にして尤も驚かす今日の作者の不利にして、幾く大層の物語を動かかり、その古來傳言の好物語なり、起り小して、前編は江戸の八百萬石にありし奥州會津加藤家の御家騒動なり</p>

浪六新刊案内

片あぶし

武者氣質

浮世草紙

當世五人男

後篇

浪六新刊案内

片あぶし

武者氣質

浮世草紙

當世五人男

後篇

浪六子著作小説

當世五人男

正價 金廿五錢
郵税 六錢

當世の群を逸せし五人の書生が、一場の破屋に苦學難行を俱にして、轉た他日の風雲を叱咤せむとするの勢ひ、果して如何なる個中の消息ありや、固より吟花嘯月の小文字にあらざるなり、

大坂城一冊

正價 金廿五錢
郵税 六錢

古今の一人豊太閤が築きあげたる日本一の名城に、すぎし慶長元和の昔々しので血に泣く殘人の老武者が、一將の功も成らず萬卒の骨も枯れし懐舊の涙を、無情の草木に注ぐ處の慷慨憤懣、浪六子の筆に上りて如何なる文章を發せしや、

十文字 前編二冊

正價 金五拾錢
郵税 十二錢

今日の讀者が陳腐として尤も嫌ひ今日の作者が不利として最も憐れを厭ふの御家騒動なり、まがも古來慣習の好物婦女より起らずして、敵は江戸の八百萬石にありし奥州會津加藤家の御家騒動なり

鬼あざみ一冊

正價 金廿五錢
郵税 六錢

浪六氏いふ、これまで著作せし二十八冊の小説よりも此の鬼あざみ一冊が却て骨の折れた心地するを、以て本書の如何を察し玉へ、

浪六子著小説

花車 一冊 正價 金廿五銭
 郵税 六銭
 此に曳出す花車は、二十五人の男が二十五人の女に懸想して、その性質品位賢不肖は勿論、そも／＼髪の毛より足の爪端に至るまでの品定め、夫婦の間は固より別て無妻の才子達には未来の妻を撰ぶ六轡三略、處女のため眞人を撰ぶ虎の巻、

海賊 前編二冊 正價 金五拾銭
 後編二冊 郵税 六銭
 功徳の書立は用なけれど、浪六氏が新たに筆を揮はれし近來の傑作、凡そ古今の小説に女と云ふもの肝要ながら、この小説には一切女氣なしの全編、さりて婦人方も讀まずに居られぬ味は骨に染むべし、

草枕 前編二冊 正價 金五拾銭
 後編二冊 郵税 十一銭
 奇聲健勁の筆を縦横に走せて皮肉的文字に社會の風浪を寫し、その間一種の書生を投じて時に謹直の學生となり、時に風流才子となり、時に小説家となり、時に政黨の志士となり千慮萬狀の人生行路を最後の大悟に訴ふるもの、

古賀市 一冊 正價 金廿五銭
 郵税 六銭
 一道殺層の俠骨を叩いて闇黒世界に百代の光明を照らすむさし盲目が、一本の竹杖に纏りて現はれいでし面目、花の如き少女が之を扶けて涙の淵に身を投げし悲痛慘憺の文字、あはせて紙背に徹せり、

浪六子著小説

魚屋助左衛門 正價 金廿五銭
 郵税 六銭
 三百年の昔、文祿年間、身は泉州堺の一町人ながら四海の戦亂を兒戯に比して別に志を越く海外に馳せ、萬里の波濤を蹴つて海國男子の一大黨を組み日本國の外に己れ帝王たるの地を求めし、惜い哉事願はれて豊太閤に毒殺せられし快丈夫が平生の面目を寫せるもの

増補 征清軍記 一冊 七拾五銭
 郵税 拾四銭
 本書は明治初年日清韓三國の交際より廿八年開戦以來平和條約批准交換迄の海陸陸戦及び戦事に於ける猛將勇士の美談逸話等に至るまで詳記したれば尋常一様の戦記にあらずして實に千秋千孫に傳ふべき一大珍籍なり、

呂宋助左衛門 正價 金廿五銭
 郵税 六銭
 魚屋助左衛門が呂宋を討つて歸りし後、再び南洋渡航を企て、豊太閤の毒殺に逢ひしまで、いはゆる斯の快男子が後の平生を寫せるものにして骨鳴り肉動くの快事に鬼哭し神泣くの情事を併せ、以て讀者に一片の甲冑を出さしむる懽懽悲哀を極む

- 浪六子新著豫告
- ◎片こぶし
 - ◎武者氣質
 - ◎浮世草紙
 - ◎當世五人男後編

24/4/34

露伴子著作小説

小きく、船一冊 正價金 廿五錢 郵税 六錢
露伴氏の著作は常に讀むもの、血を流して熱せしめ心をして昂らしめ情を激せしめ涙を流して滄茫たらしむれば此篇は意外にも可憐可愛の美少年と美少女とを貼出して其塵世の汚穢に未だ接せざるころの清新和平の心より發する其情愛を描けるものなり

小ひこり寐一冊 正價金 廿五錢 郵税 六錢
さくらの濱松の後編は如何に、彼の久四郎が身の上は何なるべきか、寢屋の正太郎は何なるべきか、又其妻は如何なるべきか、戀を恨みと戀を慕ふ三つ巴の如く廻り廻る末の収まりは何なるべきか、これ等は盡く本書にあり、

小きく、濱松一冊 正價金 廿五錢 郵税 六錢
男子生るれば父母即ちこれがために養ふらんを願ふものなり、されば人誰か一生を養ひてやあへんか、庶幾は妻を迎へんとするものは必ず先づ一讀して一考すべし價あり、また無妻主義を主張する者も必ず先づ一讀して再考すべし價あり

小雲の袖一冊 正價金 廿五錢 郵税 六錢
此篇は其の母子道徳無殘の境遇を叙し來りて、忽然として神變不思議の靈障を纏繞し、十郎が母子の厄を解くと、喜藏の情仇を爲りておこのとを離脱するも、而して十郎去りて往く所を知らざるに終る、一面意錯綜構架雄大なり

小説 五重の塔 正價三十錢 郵税六錢
篇中一個の孤徒小人なく、皆愛す可く親むべく敬すべく貴ぶべき人のみなり、然るに不可思議にも或者は怒りて人を殺さんとし或者は怒りて人を殺さんとし、狂瀾起り驚濤卷き衝突又衝突、奇事異談怨生の怨滅、讀むものとして眼眩し心迷ひ、應接に暇をなさしむ此篇は隨に此作者にあらざれば今の文壇にて是の如きものを爲し能ふものなき程の奇文なるべし、篇中大風雨の夜天覺出現して斧を揮ふ一段の如き奇も又極まれり、怪も又極まれり而して其事未だ必ずしも怪奇詭譎いたづらに讀者を欺くものにあらず、これ此篇の愛讀すべき所以なるべし

小説 瀧松 正價廿錢 郵税六錢
男子生るれば父母即ちこれがために養ふらんを願ふものなり、されば人誰か一生を養ひてやあへんか、庶幾は妻を迎へんとするものは必ず先づ一讀して一考すべし價あり、また無妻主義を主張する者も必ず先づ一讀して再考すべし價あり

田舎子著作小説

小説 いさなとり 美本全二冊 正價四十錢 郵税八錢
心強く胸太き一少年の伊勢參宮を思ひ立より一生奇異の運命に遭遇し或時は主なる女に想を懸けられ或時は吾妻に欺かれ或は情死せんと欲し或は職を離れて殺さんと欲し、七瀬八倒の境界、左支右吾の路途を經過して終に心安く身泰き老翁となるに至るまでの長くして入り組みたる談を例の露伴氏が筆に寫されたるものなり彌漫覆雨の人情、山陰水逝の世態、壯快なる驚獵の奇觀、興味多き旅行のありさまなど、巻を手にする者として怒ち長大息して嘆息し後々として笑を含ましむるに足るべし

末廣鐵腸著

戦後の日本 正価五十六銭 郵税六銭
 明治四十年日本 正価五十六銭 郵税六銭
 雪中梅 正価四十六銭 郵税六銭
 花間鶯 正価四十六銭 郵税六銭
 暁の旅 正価四十六銭 郵税六銭
 南海の激浪 正価四十六銭 郵税六銭
 闇夜鴉 正価四十六銭 郵税六銭

奴之助著

伽羅少年 正価六十六銭 郵税六銭
 八十氏川 正価六十六銭 郵税六銭
 つれの錦 正価六十六銭 郵税六銭
 岩鐵狂禪 正価六十六銭 郵税六銭
 柳江子著 正価六十六銭 郵税六銭
 雪の花園 正価六十六銭 郵税六銭

山田美妙齋著

武者魂 正価六十六銭 郵税六銭
 白玉蘭 正価四十六銭 郵税六銭
 園の二葉 正価四十六銭 郵税六銭
 萬の裏葉 正価四十六銭 郵税六銭
 盜賊秘事 正価四十六銭 郵税六銭

仰天子著

局松高 正価六十六銭 郵税六銭
 細川櫻 正価六十六銭 郵税六銭
 源三位 正価六十六銭 郵税六銭
 無名氏著 正価六十六銭 郵税六銭
 萬年娘 正価六十六銭 郵税六銭
 俠男兒 正価六十六銭 郵税六銭

文學博士男爵
末松謙澄著

天覽谷間の姫百合

洋綴菊判合本二冊
正価一十四郵税十四銭

幸田露伴著

さゝ舟 正価六十六銭 郵税六銭
 さくの濱松 正価六十六銭 郵税六銭
 ひとり寝 正価六十六銭 郵税六銭
 雲の袖 正価六十六銭 郵税六銭
 五重の塔 正価六十六銭 郵税六銭
 いさなとり 正価六十六銭 郵税六銭

太華山人著

寶ばあし 正価四十二銭 郵税四銭
 松井松葉著 正価四十二銭 郵税四銭
 金賣吉次 正価四十二銭 郵税四銭
 原抱一菴著 正価四十二銭 郵税四銭
 少年新 正価四十二銭 郵税四銭
 三宅青軒著 正価四十二銭 郵税四銭
 好男子 正価四十二銭 郵税四銭

江見水蔭著

田毎源氏 正価三十三銭 郵税三銭
 女の顔切 正価三十三銭 郵税三銭
 朝の嵐 正価三十三銭 郵税三銭
 海底の鐘 正価三十三銭 郵税三銭
 大軍艦 正価三十三銭 郵税三銭
 遠山霞 正価三十三銭 郵税三銭
 木津の篝火 正価三十三銭 郵税三銭
 利根の船歌 正価三十三銭 郵税三銭

青木文庫



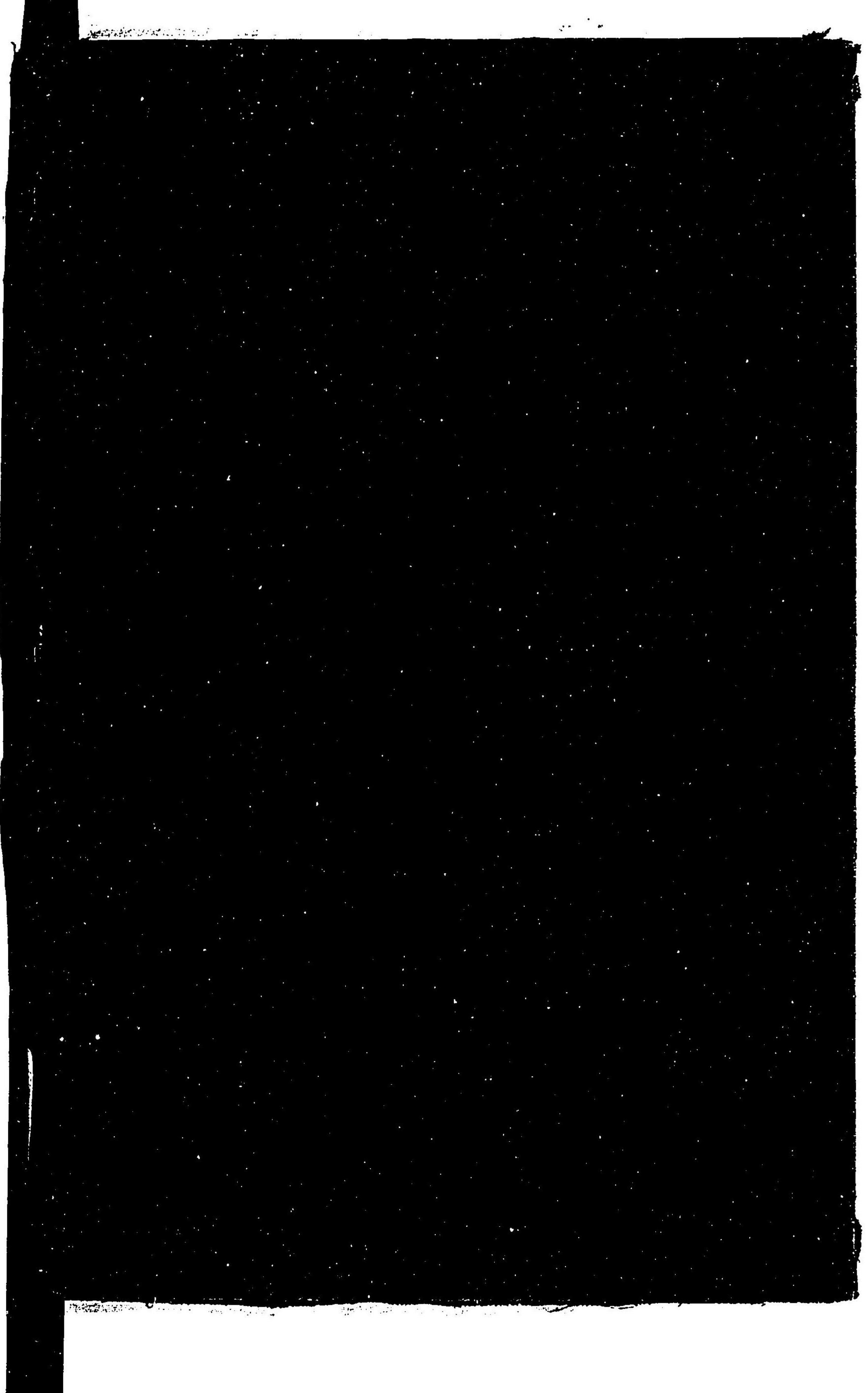
114

59

L

M

21



74
59

093948-000-0

74-59

しなさだめ

村上 浪六/著

M30

DBQ-1386



